

汪硯玉の生涯

——『珊瑚網』から見る明末の嘉興における文雅について——

はじめに

井上 充幸

明の嘉靖から崇禎に至る約一〇〇年間は、明一代を通じ、書画骨董の収集と鑑賞がもつとも盛んに行われ、「文房清玩趣味」が大流行した時代であった。この流行の中心的な担い手となったのは、従来、書画骨董の収集と鑑賞において主導的役割を果たしてきた宮廷ではなく、民間のコレクターたちであった。これは明末における「文房清玩趣味」の大きな特徴の一つである^①。

明一代を通じて宮廷が書画骨董の最大の所蔵機関であったことは確かである。元の奎章閣などの機関に所蔵されていた多くの書画は明の内府に接収され、宣徳年間に至つて宮廷内の書画骨董のコレクションは最も充実したと伝えられる^②。これらは宗室・功臣にも下賜され、諸王公の中には大規模なコレクションを形成する者も出現した^③。正徳年間以降、内府所蔵の書画骨董の管理は疎かとなり、官員の俸給として支給されたり、また宦官などの手によつて勝手に持ち出されるなど、隆慶・万暦年間に至つて、多くの所蔵品が漸次民間に流出することとなったという。とはいえ、崇禎末年に至るまで宮廷内にはなお書画骨董の名品が多数所蔵されていた。李自成軍の入城と崇禎帝の自尽により、混乱の極に達した北京に居合わせた曹溶が、同郷の汪森に語つた目撃談によれば、「甲申（崇禎一七年・

一六四四三月、余京師に留まるに、内府所藏の名蹟、人の爲に捆載して道路に棄てらるる者、街巷を充塞す。予人を遣して羅致し、日夕縱觀し、其の妍醜を別し、而して其の甲乙を第す」という状況であつたという。^⑤

ただし、明の宮廷における書画骨董のコレクションについて具体的に記録した文献は、『宣德鼎彝譜』八巻を除いて断片的にしか存在しない。嘉靖年間に嚴嵩・嚴世蕃父子が家産を籍没された際、『天水冰山録』不分巻および『鈴山堂書畫記』一巻が作成されたが、ここに列挙された書画骨董の記録もあくまで資産目録の一部としての性格が強く、「古玩」として価格以上の特別な価値を見いだす姿勢はとりたてて感じられない。明の後半期の宮廷においては、『文房清玩趣味』に対する関心は総じて希薄であつたといいうるであらう。

これとは対照的に、明末の江南には大規模な収集量を誇るコレクターが多数登場し、また同時に、これまで書画骨董には無縁であつた階層の人びとの間にまで「文房清玩趣味」が幅広く浸透するなど、書画骨董の収集と鑑賞に対する関心は高まる一方であつた。朱存理『珊瑚木難』八巻・同『鉄網珊瑚』一六巻、都穆『寓意編』一卷・同『鉄網珊瑚』二〇巻、詹景鳳『東函玄覽編』四巻、張丑『清河書畫舫』一二巻をはじめ、蘇州をはじめとする江南各地の都市に在住の賞鑒家たちにより大部の書画録が次々と編纂され、当時膨大な量の作品が巷間に流布していた様を知ることができる。^⑥ここに至つて、書画骨董コレクションは、直接には権力とは無縁の在野の人々によつて主導され始めたのである。これは中国史上始めての事態であつたと言つてよい。^⑦かかる時代状況の中で、「文房清玩趣味」は好事家の間における私的な楽しみという従来の範疇から大幅に逸脱し、書画骨董は商品価値を伴つて盛んに取引引きされるようになった。そこには書画骨董を専門的に扱う商人も参入し、流通する速度には以前にもまして拍車がかかることとなつた。^⑧

先に筆者は、明末の嘉興在住の文人、李日華の『味水軒日記』の記述を手がかりに、上述の諸点について論じた。^⑨

その際、李日華と同時代の文人についても幾人かについて言及したが、本稿ではその中から、李日華ととりわけ縁の深かった嘉興のコレクター、汪訶玉を取り上げる。

汪訶玉は『珊瑚網』の著者として知られる人物である。後の第二章において詳述するように、自ら観閲した書画作品の記録をもとに編纂されたこの著述は、「法書題跋」二四卷、「名画題跋」二四卷、計四八卷からなる大部の書画録である。明の最末期に成立したとされるこの『珊瑚網』は、『清河書画舫』と同じく散逸してしまった自家旧蔵の作品を中心に、『珊瑚木難』によつて創始された体例を踏襲して膨大な項目数を収録したものであり、明の後半期に多数著された書画録の中で、最も体例が完備されたものの一つと評される^⑧。汪訶玉は、『珊瑚網』の隨所に所収の作品にまつわる自らの思い出を記しており、墓誌銘などまとまつた伝記資料が存在しない彼の事跡についても、かなり具体的に窺い知ることができる^⑨。本稿では、まず汪訶玉の書画骨董の鑑賞に大きな影響を与えた文人たちとの交友関係を述べ、次に彼のコレクションの収集と散逸をめぐる状況について概観する。そして最後に『珊瑚網』成立をめぐる状況を論じ、明末における「文房清玩趣味」のありようと、その「在野」の担い手たちをとりまく時代状況について、嘉興を中心としてその一端を探っていきたい。なお、汪訶玉については、万木春^⑩が李日華との交友関係を中心として、また劉金庫^⑪が明末清初における書画作品の流通に関連して、それぞれの観点から論じているが、ここでは改めて汪訶玉の生涯を中心に据えて、嘉興の社会における汪氏一族の浮き沈みの様を辿りつつ、上述の諸点について述べていくこととする。

第一章 汪氏一族の事跡

第一節 汪氏のコレクション形成

汪硯玉は、字は棗卿、号は玉水、^②原籍は徽州府歙県の人である。その遠祖は、宋元交代期に嘉興府下へ移住したとされ、曾祖父の代から秀水県城南の蓮花溪に居を構えた。李日華「汪愛荊居士伝」^③によれば、汪硯玉の曾祖父にあたる怡荊公汪鑑は、字号や生没年是不詳ながら、弓射の腕に優れた武人であった。嘉靖年間に、彼は曾銃の幕下に入り、西北辺境における対モンゴル戦に従事して軍功を立てたという。祖父の懷荊公汪頤は、字は明夫、生没年是不詳、曹銃の失脚に伴い帰郷して隱居した汪鑑の生計を支えるため、「市廛に混迹し、躬ら貿易して以て鑑に給す」^④とあるように、商業活動に従事した。残念ながら、汪氏が具体的にどのような商売に従事していたかについては、いずれの資料にも述べられていない。崇禎『嘉興県志』巻五「建置志」は、かつて西施が刺繡を学んだという地に建てられていた「学繡塔」を、萬曆三五年（一六〇七）に汪頤が修築、後に汪硯玉の父、汪繼美が重修したことを伝える。^⑤織物業の盛んな嘉興において、汪氏がそれに関連する商売を行っていた可能性も充分に考えられよう。なおDMBは、汪硯玉が後に塩官となったことから、汪氏が代々塩商として財をなしたと推測する。いずれにせよ、後に大量の書画骨董の収集を可能とする経済的基盤を形成したのは、おそらくこの頃からであろうと思われる。^⑥

汪硯玉の父の汪繼美は、字は世賢、号は愛荊など、生年は不詳だが、後述するように天啓六年（一六二六）頃に死去した人物である。文辞において声望が高かったものの、万曆初頭には早くも挙業を断念し、以後官途に就くことはなく、自宅敷地内の西側に凝霞閣を、東側に墨花閣をそれぞれ築き、^⑦「性は傳記を披覽するを喜び、異書の精刻な

るに遇えば、輒ちに厚直にて之を購ひ、古名賢の書畫奇蹟と與に雜置して樓に滿つ。風雨の間暇には、即ち樓に登りて卷帙を手撫し、呶哦して自ら快しむ」という風流三昧の趣味生活を送った。さらに彼は広大な庭園を造成し、凝霞閣を巡る水石の間に遍ねく公孫竹を植え、自宅の花圃で蘭を栽培、「盆樹」、すなわち所有する百本あまりの盆栽は「俱に定、均州、龍泉の青東磁、宣徳の填白、嘉靖の回青一ならず。石は俱に靈璧、將樂、英莚種種あり」と、宋から明にかけてのアンティークの陶磁器に、様々な奇石をあしらうという凝りようで、さながら「倪迂の清秘處を彷彿せしむ」という有様だったという。

このように汪繼美は、法書名画から、数々の文具・調度、はては盆栽や庭石に至るまで、ありとあらゆる物品を収集したが、彼がかくも深く「文房清玩趣味」にのめり込むことになったのは、同郷の項元汴との交際がきっかけであった。

項元汴は、字は子京、号は墨林山人など。嘉興を代表する「望族」、すなわち進士及第者を排出した一族出身の名士としてのみならず、当時の最も著名な書画骨董のコレクターとして知られ、彼の所居である天籟閣に所蔵されていたコレクションは、明一代を通じて最大級の規模を誇った。汪何玉によれば、「弱冠の時、慧空、慧鑑、大洲、竹堂、定湖の諸方外と遊び、因りて子京公を識る。是の巻は其の初めて購ひたるの者なり」とあり、若き日の汪繼美が項元汴と知り合ったのは、禅僧たちとのいわゆる「方外の交」を通じてであったという。彼らはいずれも詩文書画に秀で、諸方の文人たちと交流した。禅への深い傾倒は、江南の文人の精神生活における顕著な特徴のひとつであるが、嘉興における文人と禅僧との盛んな交流は、いわゆる『嘉興藏』として結実するなど、嘉興の文化を考察する上でとりわけ重要な要素である。

若い頃から禅に親しんだ汪繼美は、後に「維摩丈室」を建て「烏思藏の秘妙佛、大士像を供して之に對」したと

いう。^④ 墨林居士と号した項元汴もやはりそうした一人で、意気投合した彼らは交際を重ね、「後更に子京に求めて『愛荆圖』を作らしめ、趙伯駒に倣ひ、青綠山水を成る。款に云へらく、「墨林子項元汴孝友汪君の為に寫す」と。知らざる者は俱に子京の本色に非ざるを疑ふ」という間柄になったという。^⑤『珊瑚網』に汪氏の所有と明記された書画作品には、その多くに項元汴の題跋が附されており、汪繼美は項元汴を通じて多くの書画作品を鑑賞・入手したと考えられる。

汪氏の書画骨董の収集に大きな関わりを持つもう一人の人物は、吳頭科である。吳頭科は、字は功甫、秀水の太学生で、^⑥「功甫は冢宰默泉公の孫為り。博雅にして豪邁、宋几元羽皇と共に業を嘉樹堂に習ふ。^⑦余嘗て其れと社課を与にし、而して功甫餘閑を以て古玩を交易し、家甫曾て其の饕餮鼎を購ふ^⑧」とあり、汪何玉とは同学で、後述の「駕社」の活動を介して双方の所蔵する書画骨董を盛んにやりとりするという間柄であった。^⑨

默泉公とは、嘉靖二年（一五三三）の進士で吏部尚書に至った吳鵬、字は万里のことである。彼は「外臺に在りて、事に遇いては敏決し、頗る才名有り」と評されたものの、「惜しむらくは晩節委蛇にして、其の孫をして世蕃の女を娶ら令め、其の女をして董份の繼室と爲さ令め、份の位已に高きを以て、鈞敵の體を講へ、遂に物議を招くに至る^⑩」と記され、嚴嵩・嚴世蕃父子や董份と縁戚關係を持ったことで、彼らの失脚後は「訟計大興^⑪」し、夫人と息子たちも次々と病氣のために先立ってしまったため、その晩年は悲惨であったという。^⑫「郷に居りては、僕従は勢を怙みて人を陵轢すれば、瑕瑜は自づから相ひ掩ふべからずと云へり」と、郷里の秀水にあつて、吳鵬の奴僕たちは威勢を恃んで横暴の限りを尽くし、また吳鵬自身も、「尚書、里門に居りて自ら輶匿せざれば、是を以て郷人皆之を惡む」と評されるなど、以後、郷里の秀水における吳鵬一族の評判は頗る悪化し、孫の吳維貞、字は鳳山は、「少くして志行有れども、先人の故を以て振はず」、諸生のまま終わつたという。^⑬ 吳頭科は、この維貞の長子で、吳

鵬の曾孫にあたる。彼が副業的に商っていた書画骨董の類は、あるいは明代における最大級のコレクターでもあった嚴嵩・嚴世蕃父子との縁故によって入手したものとも想像される^⑤。

汪硯玉が万曆四五年（一六一七）春に記した識語において、「吾が郷里の呉太學功甫世を謝して後、諸珍秘散出す。時に先君是の圖を得、又た唐鏞の靈壁石の名は「列翠」なる者、及び他の書畫玩好を得たり」とあるように、呉頭科は万曆末年頃に死去、「愚父子は萬曆の間に於いて諸名畫を集む。半ばは家藏に出で、半ばは諸友と易ふ。内之を呉功甫に得るもの多しと爲す^⑥」と、彼が所有していた書画骨董は、汪氏のコレクションの重要な部分を構成することとなった。

汪繼美の記した題跋などの文章はほとんど残っておらず、嘉靖年間から万曆年間にかけて、汪繼美が上述の項氏や呉氏、そのほか多くの人士から収集した書画骨董の詳しい来歴は、残念ながらあまりよくわからない。ともあれ、彼が豊富な資金力によって収集したコレクションのうち、画作品については、汪硯玉の証言によれば「吾が家の凝霞閣は、向に當代の諸名畫を藏し、冊に爲るもの約半千、嘉客累日の翫に供すべし^⑦」とあるように、画冊の形に装丁^⑧、《韻齋真賞》・《六法英華》・《丹青三昧》などと命名し展観に供した。一方、書作品については、各種法帖のほか、主に元末からほぼ同時代の諸家に至るまでの真蹟一千余点を収集し、《国朝名公手蹟》などのように巻物に仕立てて収蔵した。汪氏のもとには、地元の嘉興のみならず、蘇州の王穉登や俞安期、松江の董其昌や陳繼儒ら、著名な文人が観閲に訪れ、多くの書画に題跋を附し、汪氏のコレクションの価値と名声を高からしめた。

第二節 若き日の汪硯玉——万曆から天啓年間にかけての事跡——

このような家庭環境のもと、万曆一五年（一五八七）に汪硯玉は誕生した。彼は、父が所蔵する数々の書画骨董を

鑑賞する傍ら、詩文にも長じ、嘉興の友人と詩社を結成するなど、早くから文事に秀でていたという^⑤。とりわけ、明末の嘉興の文人墨客が多数集った「鴛社」の設立は、彼の生涯を知る上で大きなポイントとなる。「鴛社」は、嘉興城外の鴛鴦湖にちなんだ名付けられた詩社で、「鴛水詩社」・「鴛湖社」などとも呼ばれる。この詩社を主宰したのは李日華の子の李肇亨と、嘉興の「望族」出身の譚貞默であり、「禾中前後の輩、及び海内の寓公、方内方外、黃冠衲子は羣れて而して詩を爲り、高人勝士は一時に萃集」し、「風雅之盛」を極めたという。管見の限り、「鴛社」の同人による作品集は現存しておらず、その全貌をうかがい知ることはできないが、李日華の序文によれば汪硯玉もその主要な同人の一人であり、「珊瑚網」「法書題跋」卷一八「江岡赫蹏名蹟」には、詩社の同人たちから汪硯玉に宛てた書信が多数収められている。そこには互いの詩文の品評や、作品集の出版、書画骨董の貸借のことなどが記され、彼らの活動ぶりを窺い知ることができる。「鴛社」の同人たちとの交友は、汪硯玉の生涯にとって重要な意味を持つことになるのだが、その点は折に触れ述べていきたい。

万曆四二年（二六一四）の重陽には、嘉興の諸名士を集めて「湯餅会」を主催し、呉頭科の旧蔵品を披露したり、同四六年（二六一八）の春には、南京の三山草堂に家蔵の祝允明《聞絃詩》を掛け、楽器の名手を集めて演奏会を催すなど、若き日の汪硯玉は風流三昧の私生活を送った。その間、万曆四四年（二六一六）の冬には、隣家から発生した火災が自宅の凝霞閣に延焼、使用人による初期消火によって大事には至らなかったものの、父の代に呉頭科から入手した方方壺の作品を失つたりもしている^⑥。

書画骨董の鑑賞と収集に関しても、父に劣らず熱心であり、その方面で汪硯玉と最も深く関わった人物の一人は高道素である。高道素は、南宋から続く名家の出身で、原名は斗光、字は明水、後に改名して諱を道素、字を玄期とした。万曆四七年（二六一九）の進士で、天啓末年、宦官の黃用と共に湖広の衡州にて桂王の邸第を造営し、その

功績により工部屯田司郎中となるも、崇禎己巳（二年・一六二九）、桂王の邸第が大雨により倒壊、その責任を問われ処刑された^②。書法に秀で、「鸞社」の同人でもあった彼は、汪硯玉とは「玄期と余とは幼き自り金石の交あれば、其の鑒古に精なるを知る^③」という間柄で、「萬曆壬寅（三〇年・一六〇二）の間、明水君は即ち愚父子と相契す。斗酒して文を論じ、床を聯ねて夜話す^④」るほど、万曆後半期頃より、一家共々親しく交際していたという。また、詩文について語り合うかたわら、「彼此に一佳玩を獲れば、相ひに賞し或いは互ひに易ふ^⑤」と、互いの収集品を鑑賞しあい、汪氏所蔵の米芾《山水》・呉鎮《水石竹枝》・陸広《谿山清眺》と、高道素所蔵の「靖密壇盞十二」・「乳密紙槌瓶」・「天然花影葵几」などを交換したことが記されている^⑥。

一方で、汪硯玉は幾度か科擧に応じており、万曆三十二年（一六〇三）の秋には受験のため杭州に赴き、同四〇年（一六一二）の秋には、同じく南京に赴いているが、結果は芳しくなかったようで、結局、万曆末年頃、捐納により貢生の身分を得た。天啓三年（一六二三）には父の命に従って北京に赴き、塩運使判官の職を獲得、山東の済南に赴いた。清の雍正年間に編纂された莽鵠立等撰『山東塩法志』一四卷などの諸書には天啓・崇禎年間の記述が欠けているため、汪硯玉の在任年次・期間等は不明であるが、おそらく天啓三年の冬以降、天啓七年（一六二七）までの間と推測される。正途により任官できなかったことを、汪硯玉は生涯悔いていたようである。たとえば、万曆四八年（一六二〇）に呉東生が描いた汪硯玉の肖像画には、陳繼儒をはじめ諸名人が賛を附したが、その思い出には、「噫、余は銀光面に非ざりき、安くんぞ能く圖に應じて駿を索めんや^⑦」とあり、他にも随所にこうした感慨が記されている。彼がそれほどまでに後悔した理由は、第一章第一節でその名が登場した宋鳳翔の伝記に「是の時江左殷富なれども、而れども令甲は進士に非ずんば顯要に躋るを得ざれば、皆首を屈して揣摩するのみ^⑧」と述べられているように、明末の江南にあつては、どれほど多くの資産を有していようと、進士及第を果たせなければ一定以上の出世を

望み得なかつたためである。^⑧

ともあれ、まがりなりにも官位を手に入れた汪何玉は、同郷の李日華の家との縁組みにも成功する。李日華、字は君實、号は竹嬾は、明末を代表する書画の鑑賞家であり、父の汪繼美の代から親交があつた人物である。^⑨ 李日華と汪何玉との交友関係は、万曆四二年の暮れに始まつたようで、李日華の著した『味水軒日記』卷六の万曆四二年（二六一四）二月一八日の条には、汪繼美・汪何玉父子の自宅を訪問した際の詳細な様子が記されている。

「石夢飛、夔拊昆季、兒子の亨とともに、南郭の汪愛荊の東雅堂に造る。堂前に松石、梅蘭を列置して楚楚たり。已にして書室の中に入り、手づから一卷を探りて展げ視るに、乃ち元人の翰墨なり。首幀は《仿小米雲山》、樹行は欹疎、嵐氣は滂鬱として、當しく是れ「房山一輩人而無」なるべきか。後に楊鐵崖、趙奕等の雜手筆數通有りて、亦佳なり。已にして墨華閣に登るに、大理石屏四座、石榻一張、几上に宋板書數十函、雜帖數十種、銅甕、花瓶、疊洗の屬を列べたり。汪君自ら娛しみ弄して以て意を外交に絶つ所の者なり。」^⑩

文中の墨華閣は、先に汪何玉が記したところの自宅東側に位置する墨花閣を指し、他にも東雅堂などの樓閣があつたことが知られる。続いて李日華はこう記す。

「愛荊少き時曾て黃冠の王雅賓と遊び、故に嗜古の趣を得たり。雅賓は文衡山先生の門下の士なり。汪の長子玉水太學に遊びて歸り、石氏の昆季と同里なれば、余因りて相引きて以て入るを得たり。玉水又余を導きて一密室に入る。櫥を見るに高さは四尺、濶さは五尺、紗を以て蒙ひ隔て、中に烏思藏佛大小百餘軀を貯

ふ。又白定の宣磁數四、瑪瑙の彌勒尊者一、頭腹は俱に瑩白にして而して衣紋は紅纏絲にして、皆生質に就きて之を琢みたる者なり。又白玉の觀音一、高さは八寸、手に鑑一つを提げ、紅鱗は乃ち瑪瑙にて琢む所の者なり。憶ふに昔年華亭の徐文貞公の家の紀綱の僕、多寶を捨て佛事を營まんとす。曾て一僧を介して先師馮具區先生に文を作らしめ、此を以て潤筆と爲さんことを求む。余爲に代りて草し、而して觀音は留めて先生の書室の中に供したれども、二月ならずして失去し、跡を踪る可からず。今忽ちにして此を觀ること故人に逢へるが如し。而して旁に添へたる一善財は、則ち他の玉にて琢む所にして、頭は白く背膊もに俱に白く、而して腰に裹ひたる裳衣は乃ち藍色にして、亦た奇品なり。」

ここで注目されるのは、汪繼美が書画骨董の収集を始めるきっかけを作った人物として、道士の王雅賓なる人物が挙げられているところである。王雅賓は、諱は復元、雅賓はその号である。文衡山先生、すなわち文徵明の門下の士となつて鑑識眼を磨き、文徵明の没後に嘉興に戻ると、粗末な自宅に奇物佳玩を収集し、それら売り買いしつつ隠棲した。当時の江南における文人たちの間には、道教の道士を介した交際もあつたことが分かる。また、長子の玉水、すなわち汪硯玉が、当時太学生であつたことも記される。なお、李日華が、師である馮具區先生、すなわち馮夢禎との思い出と共に記した白玉の觀音像については、後に再登場することになる。

「初め愛荊董太史に堂扁を書さんことを丐ふに、董詢りて其の居東に向けば、因りて之を「東雅」と命ず。見る者頗る其の據る無きを疑ふ。余是の日、適々名公雜札一卷を攜へたれば、堂中に就きて之を觀るに、彭隆池年張元洲に與ふるの東有りて、云へらく、「軟輿暫く東雅堂に赴かん」と。當に奇觀の語有るべし。玉水

因りて大ひに彭暢して以て千古の合を爲すと云へり。薄暮、石氏酒榼を携へて至り、痛醉して而して別る。霜月空夜に滿ち、漏下五十刻なり。」

文中の董太史とは、董其昌のことを指す。ここでは、汪繼美の依頼によつて董其昌が東雅堂と命名したことの由来が明かされ、両者の親交ぶりをうかがうことができる。

そしてこれ以後、『味水軒日記』には汪硯玉の名がたびたび登場し、先の訪問の六日後には、今度は汪硯玉が李日華のもとを訪れ、溫陵の黃克纘紹夫なる人物の刻した法帖《鵲遊亭楷書帖選》を寄贈、万曆四四年（二六一六）三月にも、汪硯玉は趙子昂の行書《光福寺碑記》真蹟なる作品を携えて李日華を訪問している。さらに、同年六月には李日華が汪硯玉のもとを再訪問し、八月には汪硯玉所蔵の《石湖春曉卷》を借り受けるなど、両者は親交を重ねていった。

そしてついに両家は縁組みに至るのであるが、李日華が汪硯玉に宛てた手紙によれば、「令郎の嘉禮、一媒は遠く、一媒は多事なり。幸する所は我が兩家之を相ひ知れば、素より言語して以て竟に鄙意を達すべし。一に簡靜を以て主と爲さば、粗蠶の數事は、一舟を以て潭府に達せしめん」とある。令郎、すなわち汪硯玉の子は、名を成淵といい、当時はまだ庠生であつた。汪成淵と李日華の孫娘との縁組みは、婚礼に必要な品々を潭府、すなわち山東の濟南に送ることから、汪硯玉が山東へ赴任中に行われたようである。また、おそらくこの縁組みが機縁となり、李日華を中心に編纂が進められ、黃承昊が重修した『嘉興臬志』に、先述の「学繡堰」（巻五・汪繼美の伝（巻二四）、汪硯玉の作品（巻一九「嘉禾烟雨樓賦并序」、巻二〇「蘇小小墓」・「烟雨樓」・「長水曹廟」・「汪家灘」）などが収録された。汪硯玉の一族は、天啓年間に至り、名実ともに地元嘉興の名士として認められ、その仲間入りを果たしたので

ある。^⑧

なお、濱島敦俊は、李日華『味水軒日記』巻八の万曆四四年（一六二六）七月一八日の条に記された同族による祖先祭祀の記事と、嘉興南部の王店鎮に代々居住する別の「望族」たる李氏の族譜である『嘉興梅会李氏族譜』の記述とを対照し、二つの李氏が元来全く無関係の氏族であり、李日華の一族である「秀水李氏」が、李日華の進士及第後に「宗族」形成を開始した、いわば「成り上がり」の一族（暴発戸）であつたことを論証している。^⑨ 筆者が前稿において述べたように、若き日には「山人」としての人生を選ぶことも考えていた李日華が、後に「賞鑒家」としての地位と名声とを確立し得たのも、やはり万曆二〇年（一五九二）の進士及第による嘉興での社会的権威の獲得が、その背景にあつたためである。そして、第一章第一節で述べたように、汪氏が商業活動によって資産を形成したのと同じく、秀水李氏の場合も、李日華の父の李応筠が嘉興における不動産経営によつて蓄財するなど、両者の出自や境遇には共通する点が多かつた。^⑩ 両家が縁組みに踏み切つたのは、李日華の成功例をロールモデルとして自らの社会的地位の上昇を図ろうとする汪硯玉と、嘉興における自らの社会的地位を一層安定・発展させようとする李日華との思惑が一致したためであつたといえよう。そして両者を繋いだのが、「鴛社」の人脈を基盤とした書画骨董に対する収集と鑑賞活動であつた。つまり、彼らにとつてそれは、既存の「望族」に互して嘉興の社会における新たな地位を獲得していくための戦略にとつて不可欠な「文化的資本」だったのである。^⑪

第三節 汪氏の没落について——天啓末年の事跡——

天啓六年（丙寅・一六二六）は、汪繼美・汪硯玉父子にとつて、その運命が大きく暗転した年であつた。同年の秋のこととして、汪硯玉は後にこう記している。「天啓丙寅の秋、余都門に在りて聞くなり、先子此の冊を以つて諸

玩好と共に珂雪姻家に質すと。」この時、任地の山東を離れて北京へ赴いていた汪何玉は、父の継美が、おそらく緊急に資金を調達する必要に迫られたのであろう、『国朝名画大冊』と古玩を李肇亨のもとに質入れた、という知らせを受けた。この画冊には、姚綬・沈周・陳淳・文徵明・唐寅・項元汴・周之冕ら、明代を代表する名手の画作品がおさめられており、李日華も過去に絶賛していたものである。そして、他の古玩の中には「内に白玉の대士、高さは尺餘、兩玉侍は高さ之に半ばする有りて、綠松を琢みて岩座と爲せば、乃ち宋徽の最も精工なる者なり。太僕公嘗て云へらく、玉像は馮具區先生の珍供せる所に係る」と、先に引用した『味水軒日記』に登場した白玉の觀音像も含まれていた。こちらに関して汪何玉は、「余東歸の費繁なるに迫れば、竟に贖を取るに及ばず、殊に軫念せるなり。然れども猶ほ幸にも生面の人及び俗漢の手に落ちゐらざるなり」と述べているが、事態は更に悪化する。

翌年には父の継美が死去したため、これに伴い汪何玉は嘉興に一旦帰郷する。「何ばくも無く、余歴下自り東垆に還るに、庭中の紫篠數百個、盡く人の爲に戕わるる所となる」と、彼が留守中に、自宅の周圍に植えていた竹林は伐採され、また「培灌の課を失えること天啓丁卯の變の如く、致枯瘁を致すこと少なからず」と記すように、自慢の盆栽の数々も、手入れする者もないまま枯れるに任され、家の様子はすっかり荒れ果ててしまっていた。彼の父の死そのものについては、「未だ幾ばくならずして、余重ねて不憫を罹る。君實太翁珂雪親家と共に奠款に來たり」と述べるに留まり、具体的にいつ死去したのか、また、その死因が何であったのか、についてはうかがい知ることができない。李日華が記した祭文にも、「奈何せん一たび疾み、遽かに蓬嶺に歸す」と、病死したことが伝えられるのみで、経済状況の悪化との関連についても触れることはない。

以後、李氏からの経済的援助もむなしく、さらにその翌年、崇禎元年（戊辰・一六二八）の春には、「崇禎戊辰の春、先人の空の爲に費を厝し、因りて家蔵の書畫・宋元代の名蹟各おの百餘冊、卷軸は是に稱ひ、並びに虎耳彝・雉卣・

漢玉・犀珀の諸物を出し、賞裏の事に易ふ」とあるように、家蔵の書画骨董の多くを放出して、換金しなければならぬ事態になったことを伝える。また、別の箇所でも同じく、「意はざりき、崇禎戊辰の春、内外の輿に遭ひ、殯事を營み、古玩を典質す」と述べており、父子二代にわたる収集品は大半が散逸してしまった。

以上、天啓六年の秋から崇禎元年の春にかけての、前後三年に渉る「天啓丁卯（七年・一六二七）の変」については、不明な点が多い。この異常事態について、陳之邁は、「後に余 東省に在りて輿に遭ひ、宵人のために齋頭の物を罄せらる」という件を引き、魏忠賢の収奪によるものと推測している（DMB “WANG KOTU”）。「宵人」とは宦官のことを指す。結論から言うとおそらくこれは妥当な説だといえよう。なぜならこの全く同じ時期に、汪硯玉らと深い関わりがあった程季白なる人物が、魏忠賢の引き起こした疑獄事件の一つ、「黄山の獄」に連座し、汪氏もこれに巻き込まれた可能性が高いためである。この事件については別稿にて詳述するが、汪氏の経済状況の悪化と、それに伴うコレクションの散逸は、父亡き後の汪硯玉にとって、公私両面にわたって、生活上の劇的な変化をもたらすこととなった。

第四節 コレクション散逸後の汪硯玉——崇禎年間の事跡——

崇禎年間に入り、経済面において困窮する汪硯玉の足元を見て、家蔵のコレクションの大半を買い取っていったのは、主に王越石をはじめとする徽州の書画骨董商人たちであった。これについては、すでに別稿において述べたとおりである。汪硯玉自身も、一旦は散逸してしまった書画骨董を、再び手元に回収しようとする努力を細々と行っていた。とりわけ、父の汪継美との思い出が籠もった趙孟頫《光福重建塔記》真蹟については、「先荆翁 舉業を習へるの時、即ち趙の書したる《光福碑記》を得、墨牀筆格の間に置きて、時に一たび展玩せるなり。己未（万曆

四七年（一六一九）の春、董太史余の舍を過ぎり、因りて此の巻を觀、數語を著す。：（中略）：乃ち余 竟に殯事の需むる所の爲に、諸々の藏玩を鬻ぎ并せて趙の蹟を去り、今に至りても猶ほ先澤の存せざるを悵むなり。第だ卷に汪氏の印記を留めて爲に驗ず可ければ、他年子孫或いは之を購ふ者有らば、未だ合浦の珠の還るを得るや否やを知らざるなり。時に崇禎癸酉秋に値る」と述べて、せめて子孫の代に再びこの作品を取り戻し、併せて汪氏が経済的に立ち直ることを祈念している。

その一方で、汪硯玉は様々な文献を博搜して著述に専念しはじめ。崇禎『嘉興県志』には、汪硯玉の著述として一八点の作品が列挙されているが、それら著述のうち、現在に至るまで伝えられ、参照可能なものは四点が存在する。

それらのうちで成立が最も早いものは、『西山品』一卷・附『西山蠟屐音』一卷で、現在は紅葉山文庫旧蔵本一冊が内閣文庫に所蔵されている。崇禎『嘉興県志』に『燕都西山品』と記されている通り、この作品は、天啓五年（乙丑・一六二五）三月、汪硯玉が「鴛社」の社長の許侑如、字は恭伯と共に、万曆三十八年（一六一〇）に死去したマテオ・リッチの墓や、遼・金・元時代に創建された寺院など、北京郊外の西山にある名所旧跡を巡り歩いた紀行文および詩歌集である。巻頭には「姻家友人」の李日華をはじめ、汪継美と交友関係にあった長水の劉允繩、「鴛社」の同人の一人である程于古、「姻弟」の項真らの序文が寄せられ、巻末には、やはり「鴛社」の同人の洪元基および洪邦基、戴岳英、北京出身の項震、同行者の許侑如らの跋文が並ぶ。出版は、同年の八月から秋にかけてであると考えられ、まさしく汪硯玉の家運が没落に向かう直前の作品である。

残る三点については、崇禎年間における汪硯玉の事跡を追いつつ、以下に紹介する。

『古今離略』九卷・『離略補』九卷は、崇禎五年（一六三二）の自跋を有し、現在、北京図書館および上海図書館に

清抄本が所蔵されている^⑧。内容は、歴代中国の塩政史を、歴代の史料に基づき項目別に記した内容である。残念ながら、天啓年間に汪硯玉が山東塩運使判官に就任してから、「未だ三月ならずして、遽かに関凶に連遭し、少も末議に参するを得ず^⑨」と自叙に述べられた事情もあり、本人の経験に基づく記述はほとんど見られない。おそらく仕事らしい仕事もしないまま、嘉興に帰郷したためであろう。この書物の編纂を崇禎五年（壬申）に終えたのは、跋文に、「歲崇禎壬申の春、闕に服して資無く、原職に補せられ伏莽す^⑩」と、生計を支えるため、再び原職に復帰することになったためである。この際にも、盆栽をはじめとする収集品を売却して、旅費を工面したことが述べられる^⑪。

汪硯玉が、いつの時点まで塩運使判官の職にあつたかは、記録が無く不明であるが、翌崇禎六年（癸酉・一六三三）のこととして次のような記事が登場する。

「癸酉の春、米家の書畫船に效ひて、舊を玉峰婁水の間に訪ねたり。回るに値り、鬻古者、方鼎の色翡翠の如くなるを示し、此の四圖、並びに名筆の妙筆十握、成審の五色の盤盂、及び珀玉の種種を得んと意欲し、遂に舉げて之に易ふ。未だ幾ばくならずして囊空しければ、鼎を將つて宋畫百冊と共に姚尚書岱の處に質す。意は失う所有るが若きも、然れども四圖には幸いにも臨本有りて在るなり^⑫」。

つまり彼はこの時点で、家に残った書画骨董のめばしいものを掻き集め、米芾が自らの書画船に秘蔵のコレクションを載せて旅をした故事にならない、自らも書画舫を仕立てて、各地の旧知の間を訪問して回っていたのである。これも明らかに、生活をやりくりするための切実な動機から発したものであり、米芾の風流とはほど遠いものであったはずである。要するに彼は、単なる一コレクターから、にわかに書画骨董商人に転身したのである。しかしなが

ら、その記すところから察するに、あまり商売上手とは言えなかったようであり、その所蔵はますます減じる一方であつた。明末の人々が有していたとされる「社会的上下感覚」に照らせば、嘉興の社会を代表する名士としての立場から、畫面骨董の取引を生業とする商人に転身すること、すなわち社会的權威に應じて人に奉仕される立場から、自らの技能をもつて人に奉仕する立場に「成り下がる」ことは、相當の心理的抵抗感が伴つたと推測される。上記の件は、この時期の汪硯玉の經濟狀況が、いかに逼迫したものであつたかを物語るエピソードといえよう。

一方、時間が少し前後するが、崇禎元年（一六二八）に、汪硯玉は《摩詰句図》と題された画冊の制作にも乗り出しており、その由来をこのように記している。

「余嘗て蔡虧父の彙める所の畫冊を得たり。俱に右丞の詩意を寫し、摩詰の「詩中に畫有り」を以てするなり。吳下の諸先哲に廻りては、則ち「畫中に詩有り」。因りて憶ふに、都中にあること數年、毎に吾が禾の諸君子の點染の好を見るに、竊かに謂へらく、東吳一帶、嫩を専らにすること能はずと。余揣らず敢へて遍ねく鉅筆一畝を求む。輞川の遺韻絶勝にして白香山を嗜む者、刻句盈肌せんか。是を藉りて以て就李崇禎畫社を開けば、梅道人、姚侍御諸公をして、久しく落莫たるに至らざら令むるに庶かるならん。吮毫を靳しむ勿く、而して鄙人の請を夷べば幸甚なり。杜走汪硯玉拜徵。時に戊辰改元の秋。」

「詩中に画有り」「画中に詩有り」の句は、蘇軾が王維の詩の味わいを評した言葉で、詩と画とが一体となつて醸し出す芸術的境地について述べたものである。^⑧ 蔡虧父の画冊とは、王維の詩句に表現された境地を、周之冕ら蘇州の人士が画に描いた作品およそ二〇幅を集め、張鳳翼の手になる標題と王穉登の序文を得て成つたものである。^⑨ 汪硯玉

はこの作品に対抗して、王穉登らの序文をもじった檄文を發し、嘉興にゆかりの詩文・書画に優れた人士に呼びかけ、同じ主題による作品を募った。これに応じて一〇〇点あまりの作品が彼のもとに寄せられ、そのうち三〇点あまりについて、彼は『珊瑚網』の中に書き留めている。その中には、李日華・肇亨父子のほかにも、姚士麟・項聖謨など、「鴛社」の重要な構成メンバーのものが含まれる。姚士麟は、字は叔祥、「鴛社」同人の作品集である『鴛水社刻』の続編の出版に尽力した人物。項聖謨は、字は孔彰、号は易庵、項元汴の第五子の項徳達の子である。家蔵に係る書画の名品に囲まれて成長した彼は、早くから董其昌・李日華らにその書画の才を囑望され、明末清初にかけて個性的な画風を確立した人物として知られる。そのほか、明を代表する画家である仇英の孫の仇世祥や、嘉興在住の無名の書画家から閩秀詩人に至るまで、様々な人々が名を連ねる。嘉興の先人である呉鎮・姚綬の風雅に連なる目的で、汪硯玉が組織したこの「就李崇禎画社」も、「鴛社」の人脈の中から生まれたものであろう。

この『摩詰句図』は、北京の故宮博物院所蔵の『王維詩意图』と題された画冊として現存しており、『珊瑚網』所収の『摩詰句図』の記事に録文が収められているもののうち、崇禎二年（一六二九）二月晦日の跋を有する項聖謨の作品二点、呉必榮・周志・沈燁・戴晋・万祚亨・陳墉・姚潜・范明光・徐伯齡・朱暎・徐榮・李肇亨の作品各一点、および『珊瑚網』に記載の無い作品二点の、合計一六点が収められている。おそらく、現在に至るまでの間に、約半数の作品が失われ、あるいは他の作品に置き換えられたものと考えられる。

汪硯玉が、この画冊の編纂を思い立った契機としては、「余幼きころ、先君の古文辭の圖く可き者を選び、姑蘇の諸名手の書畫を泥金牋の上に於いて索めたるを見る。《桂苑叢珠》と曰ふ。此に較ぶるに更に光彩陸離たるなり」と、過去に父の継美が同様のことをしていたため、と述べる。この『桂苑叢珠』については別の箇所にも記載があり、「先君早年即ち呉下の諸君子と交わり、其の書畫を徵して、《桂花叢珠》及び諸卷軸、便面有り。…（中略）…

戊辰の春、徽友の呉集之齋頭に來たり、《叢珠》冊及び少谷・休承の二冊、並びに他の玩好を得んと欲す。余時に先慈の喪事の費の爲に、秘して世傳と作す能はず。又た點蒼の石屏、名づけて《春山欲雨》といへる者を、古梅の兩大樹と共に、悉く之に售る。念ふべきなり」と、やはり崇禎元年の時点で手放している。

汪硯玉が自らプロデューサーとなつて《摩詰句図》を作成したのは、失われる一方の自らのコレクションに替えて、過去に培つた人脈を駆使して、新たな価値を有する作品の創出を志したためである、といえよう。そして、自ら培つた書畫に対する鑑賞能力と「篤社」を通じて形成した人脈という「社会的・文化的資本」を武器に、新たな文化的価値を創出するという汪硯玉の活動は、明末の文化を特徴付けた存在である「山人」の行動に一脈通じるものがあるといえよう。^⑧

『珊瑚網』四八卷は、崇禎一六年（癸未・一六四三）の跋文が附され、多数の抄本・版本が存する。これについては第二章において後述する。

『西子湖拾翠餘』上・中・下三卷は、万曆から崇禎にかけて、汪硯玉がたびたび杭州の西湖を訪れた際の詩文を集めたものであり、杭州在住のコレクターのもとを訪問して書画を閲覧した様子を、日記の形で詳しく記している。とりわけ下巻は「古樸山房記」と題され、自分に替わつて科挙及第の希望を托すこととなつた息子の汪成淵のことを記している点が注目される。それによると、崇禎三年（一六三〇）の秋八月一三日から二三日にかけて、汪硯玉はまだ幼い息子を伴つて杭州の西湖の名勝を歴訪しているが、ちょうど会試が実施される期間に当たっていたため、二〇日には二人揃つて城内の貢院を訪ねている。^⑨そして嘉興の自宅に帰着した後の二八日には、同宗の汪挺なる人物が及第していたことを知り、おそらく将来における我が子の及第を祈念してのことであろう、師の張君なる人物と酒を酌み交わしている。^⑩

この書物そのものは、卷上の識語に、「乙酉の兵火の後、余の著作は多く散失せり。茲に僅かに此の聊札を存し、之を以て自から娛しむのみ」^⑧とあるように、明清交替の後に編纂されたようであり、のち『武林掌故叢編』に収められた。この記述を最後に汪硯玉の足跡は途絶え、没年は清初のいつ頃になるかは不明である。また、卷上の識語に、「崇禎癸酉（六年・一六三三）の夏、淵兒の試に應ぜんが爲に城に會すれば、偕に湖上の畫中樓に寓す」^⑨とあり、この年から汪成淵も科挙への挑戦を始めたが、やはり明清交代の前後を通じて科挙に及第したことを示す記事は存在していないため、おそらく彼も残念ながら失敗したものと思われる。そして汪世淵以降の家世も、現時点ではよくわからない。結局のところ、汪氏の一族はついに嘉興における「望族」とはなり得なかったのである。

そのほか、散逸して現存しない著書のうち、『樹石異綴』・『甲乙石品』・『詩稿』^⑩については、いずれも李日華が序文を寄せているところから、彼の没年である崇禎八年（一六三五）以前の成立である。

第二章 明末の嘉興における書画録の成立をめぐる

第一節 『珊瑚網』の成立について

『珊瑚網』が現在通行している四八巻本の形にまとめられたのは、自跋に附された年次から崇禎一六年（癸未・一六四三）頃のことと思われる。以来、各種抄本が清末に至るまで伝存するものの、刊本が出版されることはなく、『適園叢書』第八集に収められて、はじめて刊本の形となり、以後通行本はこれによる。後、民国に入り、『珊瑚網』の一部を摘録した『汪氏珊瑚網画継』・『汪氏珊瑚網画拠』・『汪氏珊瑚網画法』各一卷が、『美術叢書』二集第一輯に

収録され、近年では『文淵閣四庫全書』本が景印本の形で参照可能となった。

「余もまた幼き自り庭に趨り、先荆翁の所藏せる書畫を見、心竊かに之に儀す。壯じて知交の間において、名迹を掌録するを得、老に至るを以て、積みて廿餘帙有り」とあるように、長年にわたって自ら観閲した書画作品の記録をもとに編纂されたこの著述は、内容を大きく二つに分ち、法書に関する「書録」二四巻と、名画に関する「画録」二四巻の、計四八巻からなる大部の書画録である。

「書録」の内訳は、巻一から巻一八までが「法書題跋」と題され、うち、巻一・二が《魏太傅鍾繇戎輅宣示帖真迹》より唐・五代まで、巻三から巻七までが宋・金、巻八から巻一二までが元、巻一三から巻一八までが明と、各時代別に諸家の書作品計二七四種とそれらに付された題跋。巻一九・二〇「石刻墨迹」は、《岳麓山禹碑》より《豊考功筆訣》に至る六八種の拓本、巻二一「成部大帖」は、《淳化閣帖祖本》より《文氏停雲閣法帖十跋》に至る二八種の法帖。巻二二「書憑」は、「宋宣和癸卯御府所藏」より「岳州諸家書目」に至る五五家の収藏品目。巻二三「書旨」は、「蔡中郎石室神授筆勢説」より「屠緯真考槃餘事」に至る、諸家の書論。巻二四「書品」は、「六朝劉宋羊欣叙古來能書人姓名」より「平陽墨花閣雜志」に至る、歴代の書品。

「画録」の内訳は、巻一から巻二二までが「名画題跋」と題され、うち、巻一から巻六が《晋顧愷之洛神図》より宋・金、巻七より巻一一が元、巻一二より巻一八が明、ここまでが巻軸で、計六五〇種。巻一九より巻二二が、《唐宋元宝絵冊》より李珂雪《研池墨雨》に至る七〇種の冊、及び文徵仲自題《四景画扇》より《素交涼思》に至る七種の扇面。巻二三「画擬」は、「宋宣和癸卯御府所藏」より「麟湖沈氏所藏」に至る六六家の収藏品目。巻二四「画繼」は、「鄧華国画繼叙真迹」より「諸名家絵法纂要」に至る、諸家の画論。

記述の体例の特徴としては、原文・款識・題跋を、作品毎にほとんど全て収録し、列举している点が挙げられる。

この点は、明代に著された先行する題跋集、朱存理『珊瑚木難』あるいは『鉄網珊瑚』に做ったものであるといえる（『珊瑚網』繆荃孫跋）。引用書目として言及はされていないものの『珊瑚網』と題した点、また序文に「海人鐵網にて珊瑚を取ると雖も、亦た是に過ぎざるのみ」^⑧、「余更に鐵如意を揮ひて、七、八尺以下の珊瑚の枝を碎却し、網を將いて以て彌よ碧金の絲を羅せんと欲するも、火齊、木難の相い錯じる有りて、區區尋常に焉が語を著わさんか」とあることから、あるいはこれら二作品の存在を意識し、これを援用しつつ大幅な増補・拡充を行ったことも考えられる。『宣和畫譜』や『米芾書畫史』など、明以前の書画に関する著録には、これらの項目を分類して詳細に記録したものではなく、後の清代に続く著録の体例を定めたものと評価される^⑨。

一家の所蔵を中心に鑑賞した作品の題跋を記す、という点においては、『清河書畫舫』をはじめとする張丑の著作と共通している。「然れども丑の二書、前後に歲月を編次するも、皆な未だ明析ならず。阿玉の是の書、則ち前に題跋を列し、後に論説を附し、丑の書と較ぶるに綱領節目は秩然として條有り」^⑩と評されるように、体例の面においては、『珊瑚網』のほうが、張丑の諸書よりも一層整ったものとなっている。なお、両者の執筆動機について、数世代にわたる自家の収集品が散逸してしまつた後に、それら作品の記録と作品にまつわる思い出を記すためであつた、という点も共通している。『珊瑚網』を著すにあたつて、汪阿玉が張丑の著書を参照した可能性は充分に考えられる。

『書錄』卷二二「書憑」、『画錄』卷二三「画拠」は、先行する各種の文献をもとに、歴代収集家の所蔵品目を作成したものである。宋以後の主立ったコレクターと、その所蔵作品については概ね網羅しており、試みとしては汪阿玉独自のものであるが、使用した文献の範囲が限られていることもあり、それほど多くの項目が挙げられているわけではない。後の李調元『諸家藏書画簿』が、この体例を踏襲した^⑪。

「書録」卷末の「書目」・「書品」、「画録」卷末の「画繼」も、諸家の記した各種の文献に基づき、書論・画論についてそれぞれ時代順に摘録したものである。なお、「余即ち無文なれば、往哲を藉りて以て文す」とあるとおり、いふなれば「述べてつくらず」の態度に徹するため、汪硯玉個人の論を窺うことはほとんどできない。よつて、汪硯玉の書画に対する鑑賞能力がどれほどの水準にあつたかをうかがい知ることは、実はなかなか困難であり、この点では、優れた鑑識眼に基づき直感的かつ的確な批評を展開した李日華とは対照的であるといえよう。

この態度は、所収の各書画作品についての記述にも基本的に貫かれており、たとえば、自分が実際に閲覧したと記されているものについては、紙質・書体・款識など、関連する情報を事細かに注記し、また、閲覧の際自ら記した題跋もほぼ欠かさず記述しているが、多少の節略はあるものの、おおむね閲覧した日付・作品の様式や来歴・題跋の種類等を記述するなど、かなりの程度信頼するに足る、事実在即した記録が中心を占める。

一方で、個々の作品の真贋に関する弁別にはあえて積極的には踏み込まず、主として先行する諸家の題跋・書論などの引用や、自らが閲覧した他の作品との比較を行うにとどまる。この点は、たとえば史料的な考証に徹した王世貞『古今法書苑』七六卷・同『弇州山人題跋』七卷に所収の書画論など、当時の鑑賞家としては一般的な態度といえ、これらの点は、後の下永誉『式古堂書画彙考』に引き継がれ、さらに発展することとなり、画題に関係する諸資料の考証に終始することが、すなわち書画鑑賞の正統的態度であるとする、乾隆帝の「画学」として結実するに至る。

以上から考えるに、汪硯玉の本領は、第一章第四節の《摩詰句図》の創作にも見られたように、大量のテキスト情報の収集・分類・整理という、編集者としての高い能力が必要とされる場面において、最も発揮されたといえよう。

第二節 郁逢慶と『郁氏書畫題跋記』について

『珊瑚網』とほぼ同じ時期に、嘉興において重要な書画録が登場している。それは、郁逢慶『郁氏書畫題跋記』一二巻・『統題跋記』一二巻である。

著者の郁逢慶は、字は叔遇、別號は水西道人、嘉興の人である。『郁氏書畫題跋記』巻一二の末尾に附された「原跋」にはこう述べられる。

「余江南に生まれ、幸にも太平の世に値る。諸名公の家に遊び、毎毎法書名畫を出して、燕閒清畫し、共に相い賞會す。因りて其の題咏を録し、積むこと數十年、遂に巻帙を成す。然れども間ま客舟旅邸に値れば、唐宋の眞蹟に遇うと雖も、或いは筆墨に便ならざれば、則ち之を雲烟過眼に付せる而已にして、未だ嘗て方寸に往來せずんばあらざるなり。時に崇禎七年、春自り冬に徂ぎ、集めて十二巻と爲し、乃ち後に於いて記す。水西道人郁逢慶識。」

要するに、彼が長年諸名公のもとで鑑賞した書画についての記録を、崇禎七年（一六三四）に一年がかりで纏め、この書物の前半部分が成立したことを伝える。後半の『統題跋記』一二巻については、成書年代を特定する記述が無く、康熙二八年（己巳・一六八九）に記された汪森の「書画題跋記序」に、「初め是の編（前半の『郁氏書畫題跋記』一二巻を指す）を得、繼いで『續編』十二巻を得」とあり、五〇年以上を経てはじめて、『統題跋記』一二巻が出そろい、乾隆年間に採進されて『四庫全書』に収録された。余紹宋は『統題跋記』について、文中に郁逢慶による記述が全

く存在しないことから、「他書 由り轉錄して之を成れる者の似し」と、別人によつて編集された可能性を指摘する。^⑧
 現在通行している諸本については、清代の各種鈔本をはじめ、『四庫全書』本、『風雨樓叢書』本、繆荃孫旧蔵の鈔本を底本とした『中国書画全書』第四冊所収本などが存在する。先に引用した各種序跋は、いずれも繆荃孫本のみ記されたものである。

この両集の著録の体例は、おおむね郁逢慶が目撃した順に記事が並んでおり、書画・碑帖など種類別、あるいは作者・時代順などの原則に従つて編集・配列されていない。^⑨ そのため、記事によつては記述の精粗にばらつきが大きく、『四庫提要』にも、「而れども皆な未だ某は所蔵爲りて、某は所見爲るを註せず、體例は尤も分明ならず。特だ採摭繁富にして、互ひに參考に資す可き者多きを以て、故に併録して之を存し、檢閲に備ふるのみ」と、各作品が、郁逢慶の所蔵のものか、目撃したものかが不明で、体例をなしていない点を指摘している。

第三節 二つの書画録の成立と「篤社」の果たした役割

この郁逢慶の手になることが確実な『郁氏書畫題跋記』一二巻、すなわち前半部分に所収の記事を、汪硯玉『珊瑚網』のそれとつきあわせていくと、その九割近くが後者に収録されていること、そしてそのうち約半数近くは、多少の文字や体例の異同を除いて全く同一の記述となつていることに気づく。そして『続題跋記』に至つては、ほぼ全ての記事が『珊瑚網』のそれと重複する。これをどう考えればよいのであろうか。

郁逢慶自身は、汪硯玉との関係について何も記すところはないが、一方の汪硯玉は、郁逢慶との関係について、「伯承は博雅好事にして、玄鑑之を稱して「貧孟嘗」と爲し、季の叔遇と俱に余と忘年の交あり。叔遇今に至るまで神明衰えず、毎に録する所の題跋を示すなり」と語っている。伯承は、郁逢慶の兄で、諱は嘉慶。「篤社」の同人

で、陳繼儒とも面識があり、黄庭堅の書を法帖に勒石するなど、風流な趣味人として知られた。李日華はその様子を、「郁伯承は名家の子にして、結客取書するを喜び、家も亦た是を以て盡く。山人吳玄鐵常に其の家に主たり。玄鐵曲木几を擁し樹根爐を摩し、笑ひて曰く、「余は眞に富黔婁たりて、伯承は乃ち貧孟嘗なり」と。人以て實録と爲す」と伝える。そして汪硯玉は、彼の末弟の叔遇、すなわち郁逢慶から、いつも所見の書画について記した題跋を見せられていたのである。

崇禎『嘉興県志』巻一二「附例貢」の汪硯玉の記事には、彼の著書としてすでに『名蹟珊瑚網』の名が挙げられており、その四年後の成書に至る以前、すでに編纂が進行していたことを伝える。おそらく、崇禎七年に少なくとも前半部分が成立していた『郁氏書画題跋記』一二巻を、汪硯玉は『珊瑚網』編纂に際して全面的に取り入れていたことは確実である。

『郁氏書画題跋記』の記事に、汪硯玉が編集を加えた部分を検証してみると、まず、これまで彼の事跡を追う上で引用してきた彼個人の履歴・想い出に関わる部分が挙げられる。これは汪硯玉自らの覚え書きから転写されたものである。そして、蘇州文氏が刻して明代における法帖のスタンダードを確立した《停雲館法帖》^⑧や、李日華『紫桃軒雜綴』・『六軒齋筆記』など、当時彼の周囲で通行していた諸書に録されている諸名人の題跋などは、大幅にこれを省略している。

また、両者がそれぞれの著書の中で、互いの署名入りの識語から相手の名前を消し去り、あたかも自ら記したもののようになら改編している記事もある。たとえば、『梁楷画右軍書扇图小卷』に附した題跋について、郁逢慶は「天啓七年龍集丁卯十一月長至後三日、水西道人識」と署名しているのに対し、汪硯玉による同作品の記事には、全く同一の題跋に対して「天啓丁卯長至日、課花外史東雅堂中に於いて觀たり」と、自らの雅号を附している。また、米友仁

《雲山》及び趙孟頫《停琴撥絃圖》の題跋について、郁逢慶はいずれも識者の名前を省いているのに対し、汪硯玉はやはりその末尾に源崑及び脉望生と、自分の旧名や雅号を記す、という具合である。^⑧ おそらく両者は、「鴛社」をはじめとする趣味のサークル内で、同一の作品を同じ日時・場所で鑑賞する機会を多数持ち、その際にそれぞれが記した自らのノートを、互いに見せ合っていたのであろう。そして、それらを各々が自著として発表する際に、直接互いの名が文中に現れないよう配慮し、別々の独立した著作として世に問うたのであろう。

ちなみに、彼らの共通の友人、項徳新にも『歷代名家書画題跋』四巻なる題跋集が存在したという。項徳新は、字は又新、号は復初、項元汴の第四子で、「此の道に於いて項氏の白眉爲り。余と交ること最も暱し」とあるように、項氏の一族中で汪硯玉と最も親しいコレクターの一人であったが、「意はざりき、癸亥（天啓三年・一六三三）の冬日、余北自り還るに、項君已に人間世を謝し」、「玩好は迸逸」してしまつたとされる人物である。^⑨

残念ながら、項徳新の著書とされる『歷代名家書画題跋』は、余紹宋が目睹した長洲章氏四當齋傳鈔本に関する記事が伝えられるのみで、現在の所在は不明である。^⑩ 余紹宋によると、その体例は、朱存理『珊瑚木難』・郁逢慶『書画題跋記』・汪硯玉『珊瑚網』とほぼ同じで、「蓋し一時の風氣是の如し」と述べている。内容は、書画の作品一〇六点について記され、そのうち書作品が多数を占め、家蔵のものに加え、他のコレクターの所蔵品についても記録されているという。^⑪ また、項元汴の第三子で項徳新の兄に当たる項穆（原名は德枝・德純、号は貞玄）が、やはり家蔵の墨蹟・法帖の観閲・臨模を通じて得た経験を踏まえて著した書論、『書法雅言』^⑫とも、密接な関係を有していた可能性が高い。そして天啓三年に死去した項徳新のこの書も、あるいは生前に知友の間で閲覽され、後にその内容が『郁氏書画題跋記』・『珊瑚網』の両書に吸収された可能性は高い。先にも示したように、崇禎一〇年（一六三七）の段階において、『珊瑚網』の原題が『名蹟珊瑚網』と記されていることから、『珊瑚網』前半の「法書題跋」に収録さ

れた記事が、先行する『歷代名家書画題跋』の内容を全面的に踏まえていた可能性は、『珊瑚網』と『郁氏書画題跋記』との関係を考えても、充分にあり得るためである。

かかる行為は、現在の目から見れば、盗作あるいは剽窃とも映りかねない行為である。しかしながら、『画禅室隨筆』をはじめとする董其昌の書画論が、親友の陳繼儒の著書にも一字一句違わず現れるなど、当時、知己の間においては、このようなことはよく見られる現象であり、それらはあくまで互いが共有する意見であって、盗作や剽窃という意識は存在していなかったはずである。『郁氏書画題跋記』・『珊瑚網』の両書も、彼らが共有していた、書画に関する知見・美意識の集大成であり、「駕社」という共通の土壌から誕生したものである、と言うことができよう。そして、この両書が『四庫全書』に収録されることによって、汪硯玉は郁逢慶とともに、書画鑑賞と収蔵の歴史において不朽の名を残すことができたのである。

おわりに

明清鼎革の動乱に伴い、姜紹書が、「癸酉（乙酉（順治二年・一六四五）の誤り）の歲、北兵嘉禾に至り、項氏の累世の蔵は、盡く千夫長汪六水の掠する所と爲り、蕩然として遺す無し」と記したのをはじめとして、嘉興の旧家のコレクションは多くが散逸してしまふ。吳其貞が順治九年（壬辰・一六五二）に項聖謨のもとを訪ねた折には、「時に壬辰端午の日、予嘉禾に到り、子昆の家に過りて之を見るを得たり。子昆は墨林の孫なれども、時に項氏の六大房の物は已に散盡し、惟だ子昆のみ稍や存するのみ」という有様であった。また、康熙一四年（乙卯・一六七五）には李日華の孫、李琪枝を訪ねており、ここでも、「二圖、嘉興の李孝廉の家に觀る。孝廉は則ち會嘉長公の郎なり。是の日

の見たる所、昔時に觀たる者十に一二も無し。時に乙卯三月二日」と、その凋落よりは甚だしかった。^⑧

清初の時期に、嘉興の旧家に所藏されていた書畫骨董の類は、内外の商人たちの手によつて、他の地域へ運び去られてしまつてゐた。吳其貞は、北京の王際之なる人物が、嘉興の高・李・姚・曹四家の收藏品一〇〇点近くを手したことを述べてゐる。^⑨高氏とは、さきに紹介した高道素・承埏父子の一家、李氏とは、李日華・肇亨父子の一家、姚氏とは、吳其貞が程季白と古玩の收藏を争つたと伝える姚岱・漢臣父子の一家、曹氏とは、曹函光とその一族のことを、それぞれ指してゐる。^⑩

そして「駕社」は、朱彝尊の時代には誰知る者も無い有様となり、ただ嘉興の郊外に、李肇亨の書齋である写山楼を残すのみとなつた。^⑪また、「駕社」の詩文集も散逸し、わずかに李日華「駕水詩社初刻序」および「駕水月社編序」が残るのみである。^⑫

謝肇淪は次のように述べてゐる。

「今世書畫に七厄有り。高價厚値なれば、人售ふ能はず、多く權貴に歸し、眞贋錯陳するは、一厄なり。豪門籍没せられ、盡く天府に入り、蟬蠹に漸盡せられ、永らく人間を辞するは、二厄なり。噉名の俗子、好事の估客、金を揮ひて争ひて買ひ、復た涇渭無きは、三厄なり。射利の大賍、貴賤懸遷し、纔ひて羸息有りて、即ち俗手に轉ずるは、四厄なり。富貴の家、朱門空しく鎖され、榻筭に凝塵し、脉望に果腹せしむるは、五厄なり。膏粱の纨绔、目に丁を識らず、水火盜賊あるも、恬然として問はざるは、六厄なり。拙工の裝潢、面目を損失し、奸僞の臨摹、聚訟を混淆せるは、七厄なり。國破家亡、兵燹變故の厄に至りては、又た焉と與じからず。」^⑬

これは、明末の書画骨董の収集をめぐる状況とその問題点を、端的にまとめた有名な記述であるが、同時に、これまで見てきた汪硌玉とその周囲の人々が歩んだ道を、そのまま述べたものでもある。明末を中心として前後約一〇〇年に渡り、嘉興は書画骨董の収集・鑑賞の中心地として、江南において地味ながらも重要な役割を果たした。そして、清代も康熙年間を迎える頃には、その活動は終息し、北京や揚州にその地位を譲り渡すこととなったのである。

註

① 「中田一九七六」五三—六六頁、〔藤原一九八一〕一三六—一三九頁を参照。

② 「傳一九八一」、および「楊一九九〇」四八七—四八八頁を参照。

③ 後に第二代の周王位を嗣いだ朱有燾が、所蔵する墨跡・法帖をもとに永樂一四年（一四一六）に刻した『東書堂集古法帖』一〇巻や、正統六年（一四四二）に晋王位を嗣いだ莊王の、そのまた息子である朱奇源が弘治九年（一四九六）に刻した『宝賢堂集古法帖』一〇巻など、諸王による法帖刊行事業や、開國の功臣の一人、魏国公の徐達の末裔である徐弘達のコレクションなどはその一例である。「容一九八〇」巻三「歴代」三「明」一、および「井上二〇〇六」一七頁を参照。

④ 汪硌玉と同郷の同時代人、沈德符の言を参照。沈德符については、「井上二〇一一」二四頁を参照。なお、『万曆野獲編』からの引用は、『元明史料筆記叢刊』（中華書局、一九五九年）所収本による。

沈德符『万曆野獲編』巻八「内閣」籍没古玩

嚴氏被籍時、其他玩好不經見、惟書畫之屬、入内府者、穆廟初年、出以充武官歲祿、每卷軸作價不盈數緡、即唐宋名跡亦然。於是成國朱氏兄弟、以善價得之、而長君希忠尤多、上有寶善堂印記者是也。後朱病亟、漸以餉江陵相、因得進封定襲王。未幾張敗、又遭籍沒入官。不數年、爲掌庫臣官盜出售之、一時好事者、如韓敬堂太史、項太學墨林輩爭購之、所蓄皆精絕。其時值尚廉、迨至今日、不啻什伯之矣。…（中略）…蓋二三十年間、再受填宮之罰、終於流落人間、每從豪家展玩、輒爲低徊掩卷焉。

⑤ 曹溶（一六一三—一六八五）は、字は潔躬、号は秋岳、浙江嘉興の人で、崇禎一〇年（一六三七）の進士。蔵書家として知られ、『流通古書約』一卷などの著書がある。汪森（一六五三—一七二六）は、字は晋賢、号は碧巢、浙江嘉興の桐郷の人で、兄弟子弟ともども蔵書家として著名。以下、『郁氏書画題跋記』からの引用は、『中国書画全書』第四冊（上海書画出版社、一九九二年）所収本による。

郁逢慶『郁氏書画題跋記』汪森「書画題跋記序」

余往與司農曹溶氏論古法書名畫，謂，「千載而下孰辨其真偽。」司農言，「甲申三月，余留京師，內府所藏名迹，爲人摺載而棄於道路者，充塞街巷。予遣人羅致，日夕縱觀，別其妍醜，而第其甲乙。」

⑥ 明の第五代皇帝の宣德帝（宣宗、在位一四二五—一四三五）が、郊廟の鼎彝器を古式に合致させるため、礼部尚書の呂震らに命じて、北宋に成立した『宣和博古図』などの諸書や、内府所蔵の柴・汝・官・哥・均・定の各窯で焼かれた磁器の名品をもとに、その様式を定めたもの。『四庫全書總目提要』卷一五「子部」二五「譜錄類」を参照。

⑦ 『天水冰山錄』は、嚴嵩（一四八〇—一五六五・嚴世蕃（一五一三—一五六五）父子が嘉靖四一年（一五六二）に失脚後、同四四年（一五六五）に家産を籍没された際に作成された資産目録。その夥しい物品の中には書画骨董も含まれており、文徵明（一四七〇—一五五九）の次男の文嘉（一五〇一—一五八三）がそれらを整理・鑑定して資産価値を評定、その記録が『鈴山堂書画記』である。余紹宋『書画書錄解題』卷六・第六類「著錄」・三「一家所蔵」第二五葉表裏を参照。

⑧ 『珊瑚木難』の成立年次は不明。著者の朱存理（一四四四—一五一三）は、字は性甫、号は野航、江蘇蘇州の長洲の人。博学多識で詩文・書画の制作と鑑賞に優れ、布衣のまま生涯を終えた。文徵明「朱性甫先生墓誌銘」（『甫田集』卷二九所収）ほかを参照。『鉄網珊瑚』には数種類のテキストが存在するが、趙琦美が万曆四〇年（一六一二）頃に先行する諸本を編纂して成立したものが最も普及している。（韓・朱二〇一二）を参照。

⑨ 『寓意編』は正徳二二年（一五一七）から同一四年（一五一九）にかけて成立したとされる（謝一九九八）卷五「明代」三〇八一—三〇九頁。著者の都穆（一四五九—一五二五）は、字は玄敬、江蘇蘇州の呉県の人で、弘治二二年（一四九九）の進士（何喬遠『名山蔵』卷九六「高道記」都穆ほかを参照）。なお、都穆の著書にも朱存理のものと同タイトルの『鉄網珊瑚』二〇卷（乾隆二三

年（二七五八）都氏七世孫肇斌刊本）が存在し、『四庫提要』はこれを「書賈の偽託」と断じているが、厳密には全てがそうとばかり言い切れない部分もあるという。（謝一九九八）巻五「明代」三〇九頁を参照。

⑩ 『東園玄覽編』四卷・附録「題跋」一卷は、万曆三五年（二五九五）頃の成立。著者の詹景鳳（二五三七—一六〇〇）は、字は東

園、号は白岳山人、安徽徽州の休寧の人で、隆慶元年（一五六七）の舉人。王世貞（一五二〇—一五九〇）や屠隆（一五四三—一六〇五）らとの交友を通じて数々の書画の名品を鑑賞し、それらを記録した。（謝一九九八）巻五「明代」三四二頁を参照。

⑪ 著者の張丑（一五七七—一六四四）は、字は青父、自号は米庵、江蘇蘇州の呉県の人。『清河書畫舫』は、張丑に至るまでの五世代にわたって蓄積された、家蔵の膨大な書画骨董コレクションを中心に、詳細な鑑賞記録を時代・作品ごとに整理・分類して、万曆四四年（二六一六）に成立した。（徐二〇一一）ほかを参照。なお、張丑の著書にはこの他にも、同郷の韓世能（一五二八—一五九八）の所蔵する書画の目録である『南陽法書表』一卷・南陽名画表』一卷などがあり、張丑の父の張応文も『清秘藏』二卷（万曆二十四年（二五九六）刊）を著している。張応文・張丑父子については、（井上二〇〇六）一四—一五頁を参照。

⑫ 以上の書画録に関しては（井上二〇〇〇）八一—一〇頁を参照。また、（藤原一九八二）一四三—一四四頁を参照。

⑬ 「中砂二〇〇二」第一章「趣味の市場」四二—六九頁を参照。

⑭ 「井上二〇〇四」を参照。

⑮ 「井上二〇〇〇」を参照。後述の汪繼美・硯玉父子についても（井上二〇〇〇）七頁において一部言及した。

⑯ 『珊瑚網』のテキストは、後に述べるように数種類が存在する。本稿では、『珊瑚網』からの引用は、原則として『適園叢書』本により、それぞれ「法書題跋」・「名画題跋」と略称して各々の巻数を示す。

⑰ 汪硯玉の最も詳細な伝記資料としては、『Dictionary of MING BIOGRAPHY (明代名人傳)』, "WANG K'o-yü" pp.1387-1389, の項が挙げられる（以下、DMBと略称）。

⑱ 「万二〇〇八」第五章「味水軒日記」的性質及它與嘉興同時代書画著述的關係（一五九—一六八頁）を参照。

⑲ 「劉二〇〇八」を参照。

⑳ 「法書題跋」卷一七「贈汪君源崑号玉水序」および「法書題跋」卷一八「蔣元龍尺牘」によれば、もとの諱は国潤、字は源崑で

あったが、のち珂玉と改名した。史料によつては「珂玉」と誤記されることもある。号は、玉水のほかにも多数（『珊瑚網』『繆荃孫序』参照）。

②① 康熙『嘉興臬志』（康熙二十四年（一六八五）序刊本、全九卷）卷七「隱逸」汪繼美によれば、宋の端明殿學士の汪立信の末裔とされる。

②② 「汪愛荆居士伝」は、李日華の文集である『李太僕恬致堂集』の卷二五に収録される。以下、『恬致堂集』と略称し、引用は旧国立北平図書館所蔵明崇禎中刊本（全四〇卷）による。

李日華『恬致堂集』卷二五「汪愛荆居士伝」

其卜築蓮花溪，則自怡荆公諱鑑者始。怡荆公節俠慕義，以功名自期，能張五石弓，射必命中。走塞垣，居曾石塘中丞幕下。雪中連發二矢，殪二胡騎，有漢飛將軍風。會復河套議格，中丞死諫，公徒步歸里，落落與酒人遊。

②③ 曾銃（生卒年不詳）、字は子重、号は石塘、南直隸揚州の江都の人。嘉靖八年（一五二九）の進士で、總督陝西三辺軍務などを歴任、対モンゴル戦の最前線に立ち、オルドスの回復を図るも、敵嵩の誣告により誅殺される。『明史』卷二〇四「列伝」九二を参照。

②④ 清の盛楓が著した『嘉禾徵猷録』は、明代の嘉興にゆかりの人物伝を、上は高位高官から下は倭寇の頭目に至るまで集めたもの。上海図書館所蔵の五二卷附外紀八卷からなる稿本と、それをもとに校訂・印刷された五〇卷附外紀六卷からなる刻本（金兆蕃輯『楊李叢書』第二集（民國二〇年（一九三一）刊）所収）があり、以下の引用は後者による。

盛楓『嘉禾徵猷録』卷四九「材勇」

子顯，字明夫，亦知書，混迹市廛，躬貿易，以給饔。

崇禎『嘉興臬志』二四卷の書誌情報に關しては、第一章第二節に後掲の註②⑤を参照。

崇禎『嘉興臬志』卷五「建置志」

學繡塔，在縣西九里運河塘上。舊傳，西施學繡于此，故名。（學繡，一名岳秀。）上有學繡塔，歲久頽廢，萬曆丁未，郡人汪顯修，後復傾圯，顯子繼美重修。

25 なお、汪氏の書画骨董の蒐集は、この汪頭代からすでに始まっていたという。

「名画題跋」卷二「龍眠居士李伯時五馬圖卷」

26 先大父懷荆公遊雲間，得趙文敏臨此本及琥珀鑑、官窑吐壺攜歸。今僅壺存耳。

27 康熙「嘉興縣志」卷七「隱逸」汪繼美によれば、「諸生の時、學政嚴隘なれば、遂に謝去す」とあり、張居正による言論弾圧が理由とされる。

28 「名画題跋」卷三「梁溪華氏真賞齋画品」

因 憶吾家大理石，昔年亦頗勝在。西垞凝霞閣有大屏五座、小屏十數座及几榻椅櫬諸器具，東垞墨花園石稱是，俱面面佳山水也。今如烟雲滅沒矣，豈獨華氏之有聚散哉。

29 李日華「恬致堂集」卷二五「汪愛荆居士伝」

居士生而淳篤，內涵敏藻，業制舉藝，隆然有聲。時江陵相初政嚴急，無待士禮。居士遂堅意謝去，以娛親爲事。秉菊鋤，握松剪，日夷由廷除間，修花翁圃人之技，而因以寄意焉。性喜披覽傳記，遇異書精刻，輒厚直購之，與古名賢書畫奇蹟雜置滿樓，風雨閒暇，即登樓手撫卷帙，吟哦自快。又或設供烏思藏諸秘妙佛大士像，對之默坐團蒲，寂無言響，而旃檀煙一縷出繞竹樹之皴，得窺其蹤者以爲蕭然天際眞人也。性又善鑑古，鼎彝環珞，陳列左右，居恒摩挲玩繹，若有深味。

30 竹を好んだ繼美は、家蔵の劉敏《竹深詩賦卷》にちなみ、筠居士・荆筠山人とも号した。

「法書題跋」卷一二「跋竹深処巻後」

先子自少隱此君，凝霞閣下水石疊盤間，遍植公孫竹，《會稽志》所謂高不盈尺，樨翠瀟疎可愛，允宜几席佳玩。每對之，展《竹深詩賦卷》，覺空青萬餘，在玄圃中無風而神籟自韻焉。因自稱筠居士，又稱荆筠山人。

31 「名画題跋」卷八「管仲姬着色蘭花卷」

余家有漳蘭數十硯，培之多歷年所矣。每花發，則嬋嬋猗猗，穠薰可罷。欲一寫其幽致，恨無好手弄芳。一旦得管氏蘭卷，正貌漳種，初作兩葉一莖，花漸增，至後繁英叢帶，墨澗間更疎秀可喜，夫人其化工在握矣。余即以宋玻璃盞、白玉柄、紅拂水精、辟邪壓繡易之。

③② 「法書題跋」卷五「黃治翁正書法語真蹟」

崇禎壬申冬、盛友念修欲余嘉定盆樹、姑以此卷相易。成林獨樹、入畫者約百本。盆俱定、均州、龍泉青東磁、宣德填白、嘉靖回青不一。石俱靈璧、將樂、英崑種種。愚父子得之於練川陳情甫輩、供玩數十年矣。

③③ 倪迂は元末明初の文人倪瓚、清秘處は彼の所居清閬閣を指す。倪瓚は、花卉・高木が圍繞する清閬閣中に数千卷の蔵書を擁し、古鼎法書・名琴奇画を蔵したという（『明史』卷二九八「列伝」一八六「隱逸」）。沈俊が万曆三十二年（一五九四）に描いた「凝霞閣図」は、残念ながら現存していないようである。

「名画題跋」卷一八「沈士蘭作凝霞閣図」

吾翁於城南蓮花漬建閣、曰凝霞、玉遮君所題也。曲逕臨流、重垣幽邃、供設玩好、花竹扶疎、彷彿倪迂清秘處。

③④ 明末の文人がコレクシヨンの対象とした物品の範圍と格付けについては、李日華『味水軒日記』卷八、一月一七日条の「評古次第」に詳しい。（井上二〇〇〇）一五一一六頁を参照。なお、吳履震『五茸志逸』卷七は、これを董其昌の言として記す。

③⑤ 項元汴（一五二五—一五九〇）の一族とそのコレクシヨンについては、近年、中国人研究者の手になる專著が多数出版されており、（沈二〇一二）、（封二〇一三）、（葉二〇一三）などが挙げられる。また、（井上二〇〇〇）六一七頁も参照。

③⑥ 沈季友『構李詩繫』（『文淵閣四庫全書』本、全四二卷による）卷三一「法生」によれば、諱は法生、字は化儀、浙江嘉興の崇徳の人で、嘉靖・隆慶年間の杭州双徑の僧。「名画題跋」卷一七「汪南溟司馬肇林社記」によれば、慧空と号し、「宗風を克振し、傍ら翰墨に通じ、先君子と最も契合す。…（中略）…先君歳に白粲・燈油を供すること凡そ十餘載」という間柄であった。

「名画題跋」卷一七「汪南溟司馬肇林社記」

彬公、一字化儀、又號慧空。克振宗風、傍通翰墨、與先君子最契合。…（中略）…先君歳供白粲燈油凡十餘載。

③⑦ 「名畫題跋」卷一七「汪南溟司馬肇林社記」によれば、「慧空之侶」で「龍淵壽堂の高足に係る」この人物もまた、「博古を善くし、吾が荊翁と忘形の交を為」したという。

「名畫題跋」卷一七「汪南溟司馬肇林社記」

又慧空之侶慧鑑、係龍淵壽堂高足、善博古、爲吾荊翁忘形交。

③8 この人物に関しては、現時点で未詳。

③9 李日華『紫桃軒又綴』（明末刻清康熙重修本、全三巻による）巻二によれば、諱は如濂、竹堂と号し、「一小樓に居り、明牕四圍、一榻一几、雜物を置かず。…（中略）…小詩を作りては澹致有り、書法は顔・柳であつたという。

李日華『紫桃軒又綴』巻二

僧如濂、號竹堂、團面白皙、如比丘尼。性僻潔、飯必精粲、飲與濯濯、必惠泉。所製糗餌精甚、剔剥松桃之屬爲餡、每十止留其二三。居一小樓、明窗四圍、一榻一几、不置雜物。夜寢別所、置一爐其中、純薦沉麝、旦開戶即去之、欲香氣氤氳、而不逢其烟燎也。作小詩、有澹致、書法顔、柳。

④0 沈季友『櫟李詩繫』巻三二「定湖老人真諡」によれば、諱は真諡、定湖老人と自号、隆慶・万曆年間の秀水真如寺の僧。李日華『紫桃軒又綴』巻二によれば、彼もまた、深い竹に囲まれた所居に隠棲し、「禪流の韵士に非ざれば、即ち藏躲して出ず」という人物であつたという。

李日華『紫桃軒又綴』巻二

真如諡公、自號定湖老人、所居遶屋四五畝細竹、翠烟碧霧、簾密深倩、僅通蛇徑、風過之蕭然。非禪流韵士、即藏躲不出。詩語淡雋、與項少岳同調。項子京爲作《定湖圖》。

④1 「名画題跋」巻一八「項子京荆筠図巻」

先子愛荆、字世賢、別號荆筠山人。弱冠時與慧空、慧鑑、大洲、竹堂、定湖諸方外遊、因識子京公。是眷其初購之者也。

④2 「名画題跋」巻一七「汪南溟司馬肇林杜記」によれば、慧鑑は「其の峨帽に遊ぶや、諸名宿の送行せる巻有り。文休承・項子京之が爲に圖き、焦弱侯・陳眉公之が爲に記し、篇什は甚だ繁なり」といい、李日華『紫桃軒又綴』巻二によれば、項元汴は定湖のために《定湖圖》を作した。

「名画題跋」巻一七「汪南溟司馬肇林杜記」

其遊峨帽、有諸名宿送行巻。文休承、項子京爲之圖、焦弱侯、陳眉公爲之記、篇什甚繁。

④3 江南の文人たちが禪学について語り合う「禪悦之会」については「毛二〇〇一」に言及がある。

④『嘉興藏』やその他の經典の出版事業、寺院の建立・再建のための募捐活動、茶の湯や詩文書画をめぐる日常的な交流の様相など、嘉興の文人と禪僧との交流については、なお考究すべき問題が多数あり、今後の課題としたい。『嘉興藏』研究に関しては、〔章二〇〇四〕および〔中嶋二〇〇四〕を参照。また、『嘉興藏』出版をめぐる人的交流とその文化的背景に関しては〔相田一九八四〕を参照。

⑤当時の嘉興における士人たちが、チベット仏教に対して深い関心を抱いていた様については、〔井上二〇一一〕四八頁を参照。

『名画題跋』卷一八「沈士蘭作凝霞閣図」

齋東爲維摩丈室。竹懶作「荆居士傳」所云、「供烏思藏秘妙佛、大士像、對之默坐團蒲、寂無音響、而旃檀烟一縷出、繞竹樹之罇。得窺其蹤者、以爲蕭然天際真人也。」惜此時不及圖齋景耳。

⑥『名画題跋』卷一八「項子京荆筠図卷」

後更求子京作《愛荆圖》。倣趙伯駒成青綠山水。款云、「墨林子項元汴爲孝友汪君寫。」不知者俱疑非子京本色焉。萬曆丁未夏，華亭蔣神卿過訪，留款三宿，臨別次伯起韻題卷。至于巳春，董太史玄宰來吾家鹽賞書畫，亦題卷後。數十年間，得諸名流爲先子增重，誠快事也。

⑦『法書題跋』卷一六「枝山書語怪錄」

正德間，異聞二則爲墨林項氏所珍。後歸吳功甫太學名題科者。功甫去世，又歸之愛荆府君。

⑧羽皇とは、宋鳳翔の字で、几元はおそらくその号である。吳顥科の推挽によりその名を知られた彼は、八股文を得意としたため、嘉興府城の北門外にあった彼の自宅には、弟子入りを希望する者が殺到したという。万曆四〇年（壬子・一六一二）、順天郷試にトップ合格するも出仕せず、同四六年（戊午・一六一八）の秋に死去した。

盛楓『嘉禾微猷錄』卷四六「文苑」

宋鳳翔，字羽皇，嘉興人。長於制義，初入郡庠，未知名。同郡有吳顥科者，賞其文偏爲延譽，名遂起。是時江左殷富，而令甲非進士不得躋顯要，皆屈首揣摩。鳳翔評選制義，丹黃甲乙，曲中肯綮，海內咸師尊之。居郡北門外秋涇橋東，以文投贊者接踵，筐篚亦盈庭焉。游北雍，舉萬曆壬子順天郷試第一，未仕卒。所有者『四書語錄』

④ 盛楓『嘉禾徵猷録』外紀七「幻異」には、精嚴寺をめぐる宋鳳翔のエピソードが記される。精嚴寺は嘉興県城内の南隅にあり、東晋時代に創建された名刹であったが（崇禎『嘉興縣志』卷八「寺觀」下「精嚴講寺」）、明末には巧みな経営によって五千金の資産を貯えるに至った。諸生の時代に精嚴寺の僧坊で科擧の受験勉強をしていた宋鳳翔は、万曆四十六年（戊午・一六一八）の春、「無頼」の諸生数名と結託して、二人の妓女と密通していた精嚴寺の僧侶を恐喝し、この莫大な寺産をことごとく収奪した。しかしながら、その報いによって宋鳳翔は悲惨な最期を遂げ、かつて宋鳳翔が学んでいた僧坊は諸生の読書所となったが、風雨の激しい夜には鬼哭の音が聞こえてきたという。汪何玉が呉頭科や宋鳳翔とともに学んだという「嘉樹堂」がそこを指すのか、また、汪何玉と呉頭科が宋鳳翔の悪事に荷担していたか否かは不明である。

⑤ 「名画題跋」卷九「方上清碧水丹山」

方壺畫，家甫得之吳功甫。功甫爲家宰默泉公孫。博雅豪邁，共宋几元羽皇習業嘉樹堂。余嘗與其社課，而功甫以餘閑交易古玩。家甫嘗購其鬻饗鼎。花紋粗細，相壓飛翠。饜人每以供此畫，商周法物正宜享上清於雲半。

⑥ 呉頭科の事跡については、『珊瑚網』の記述以外に詳しいことは不明であるが、万曆年間の嘉興における著名な山人で、出版事業にも積極的に携わっていた周履靖が編纂した叢書、『夷門広牘』所収の諸書に校訂者として名を連ねており、呉頭科もやはり、書画を鑑賞する傍ら出版事業にも関係していたことが窺える。

⑦ 董份の著した呉鵬（一五〇〇—一五七九）の行状によれば、嚴世蕃の女を娶ったのは、呉鵬の仲子で中書舎人の呉縉である。董份（一五一〇—一五九五）は、字は用均、号は泌園・潯陽山人、浙江湖州の烏程の人で、嘉靖二〇年（一五四一）の進士。嚴嵩・嚴世蕃父子の失脚後、彼らから贈賄を受けていたとして弾劾され官位を剥奪。帰郷後も、地元の烏程に数万頃田地を所有する郷紳として隠然たる勢力を保ち、万曆二年（一五九四）には、孫の董嗣成による家奴虐待事件に端を発する農民暴動が発生、言官を巻き込む疑獄事件へと発展した。『万曆野獲編』卷二三「礼部」董伯念、『明史』卷二五「列伝」第一〇三「歐陽一敬」ほかを参照。董份の文集である『泌園集』三七卷からの引用は、民国一六年（一九二七）刊の劉承幹輯『吳興叢書』所収本による。

董份『泌園集』卷三一「明故光祿大夫太子太保吏部尚書默泉先生呉公行状」

子男五：（中略）…次即縉，中書舎人，娶嚴氏。

⑤③ 吳鵬が吏部尚書の地位にあつた嘉靖三十五年（一五五六）から同四〇年（一五六一）までの六年間、嚴世蕃らの意向を受けて実質的な人事権を左右した。

康熙『嘉興臬志』卷七「鄉達」吳鵬

已陞尚書，尋晋冢宰，掌銓衡者幾六年。時墨相柄國侵部權，廢置多出其手，鵬不能無牽制，國史有遺焉。

盛楓『嘉禾徵猷錄』卷四「吏部」下「吳鵬」

吳鵬，字萬里，號默泉。…（中略）…鵬在外臺，遇事敏決，頗有才名。惜晚節委蛇，令其孫娶世蕃女，令其女爲董份繼室，至以份位已高，講鈞敵之體，遂招物議。

⑤④ 吳鵬の六人の子のうち、三男の吳紹は、嘉靖三十七年（一五五八）の順天鄉試と翌年の会試に及第して進士となつたものの、縁戚關係にあつた董份が順天鄉試の主考官であつたことから疑惑を招き、吳鵬が弾劾されて引退に追い込まれるきつかけとなつた。これには、嚴嵩の義子でありながら、嚴嵩・吳鵬の政敵であつた徐階とも結んだ耿定向の暗躍が関わっているが、そのいきさつに関しては、盛楓『嘉禾徵猷錄』卷四「吏部」下「吳鵬」所引の支大綸『永陵編年』の記事に詳しい。

董份『泌園集』卷三二「明故光祿大夫太子太保吏部尚書默泉先生與公行狀」

居數年，公復病，病益久。公既與世隔絕，而時俗移易，訟訐大興，或乃引繩批根，株連其子者。公聞之不恚，病雖甚無恙也。會中子紹先病夭矣，而仲子緝以訟故復夭，乃驚曰，「吾薄德人，既魚肉吾子矣，而天復割絕之耶。」病寢篤，遂卒已而。戴夫人亦卒。蓋先後皆以憂死，亦天下之至痛傷者哉。

⑤⑤ 康熙『嘉興臬志』卷七「鄉達」吳鵬

居鄉，僕從怙勢陵轅人，瑕瑜不可自相掩云。

朱彝尊『靜志居詩話』（人民文学出版社，一九九八年）卷一一「吳鵬」

尚書，居里門自不韜匿，以是鄉人皆惡之。

⑤⑥ 吳維貞の父の吳繼（一五二八—一五九二）は、字は汝善、号は小泉、吳鵬の第二子で、中書舍人より雲南尋甸知府に至る。吳維貞はその長男で、吳頤科はその長孫。吳仲行「雲南尋甸府知府小泉吳公墓誌銘」（『賜餘堂集』（乾隆一四年（一七四九）重刊本、全

一四卷附補遺(一卷) 卷二「墓誌銘」所収)を参照。(岸本一九九九)は、明末の江南地方社会における「世論」形成のメカニズムを論じ、一〇一—一六頁において、当時、郷紳に対する人物月旦が盛になされたこと、そして郷紳に対する評判は、社会全体の普遍的利害、すなわち「公」を擁護して「善」を体现する個人を称揚し、あるいはそれに敵対して「悪」を体现する個人を排撃することを通じて、民衆の間で形成されていったことなどを述べる。ここで採り上げた呉鵬とその子孫たちの事例も、嘉興民衆の「世論」が、呉氏一族の郷里における社会的地位の喪失を決定づけるに至ったものと理解できよう。

『嘉禾徵猷録』卷四「吏部」下「呉鵬」

孫維貞，字鳳山，爲諸生。少有志行，以先人故不振。

⑤⑦ 嚴嵩のコレクションについては、はじめにに前掲の註⑦および〔井上二〇〇〇〕九頁を参照。

⑤⑧ 「名画題跋」卷二「僧巨然山寺図」

吾鄉吳太學功甫謝世後，諸珍秘散出。時先君得是圖，又唐錦靈壁石名列翠者，及他書畫玩好。無何，爲鬻古輩先後賺去，復得無款山水一軸。

⑤⑨ 「名画題跋」卷一九「霞上宝坑」

愚父子於萬曆間集諸名畫。半出家藏，半易諸友。内得之吳功甫爲多。

⑥⑩ 「名画題跋」卷二二「磅礴漫興」

吾家凝霞閣，向藏當代諸名畫，爲冊約半千，可供嘉客累日之翫。

⑥⑪ これらはいずれも汪氏家藏の唐・宋・元の名蹟を集めたもので、「名画題跋」卷一九に列挙される。このほかにも、姚綬らの扇面の作品一六〇点と、文徵明らの同じく扇面の作品八〇点を、それぞれ『葉葉清風』〈披之穆如〉と題して、画冊に仕立てたという。

「名画題跋」卷二二「文徵仲」又題菊石便面

先子愛荆公，自少喜購圖書古物，每長日永夜展玩不休，尤嗜名手製筆。…(中略)…其面上書畫，則文、沈、而下陳、董，以上大作家約千餘握，内拔最精者得三百柄。…(中略)…其間骨不佳而面佳，或面佳而敵者，悉取裝冊，自姚雲東至項子京凡百六十板，題曰『葉葉清風』。又以徵仲、休承、白陽、西室數巨手書畫合作者，人自成冊共八十板，題曰『披之穆如』。

⑥2 法帖については、「法書題跋」卷一九に一括して列挙されている。

⑥3 「法書題跋」卷一八「国朝名公手牘」

吾家擬寶閣、向藏當代諸名畫、爲冊約半千、可供嘉客累日之翫。

⑥4 汪繼美的交遊した諸名人については「井上二〇〇〇」八頁も参照。彼らの手蹟は、多くが「法書題跋」卷一八「江岡赫騭名蹟」に収められている。

李日華「恬致堂集」卷二五「汪愛荆居士伝」

居士前所交遊項子京、錢滄洲、周服卿、張伯起、王百穀、孫雪居、項貞玄、郁伯承、朱君升、近則董玄宰、陳仲醇、俞羨長、高元雅、萬壽卿、釋旼公、皆得其圖詠品題、盈箱溢笥、每一展閱、又疑居士爲古人、即勝國倪元鎮、顧仲瑛、曹虛白諸公不啻也。

⑥5 汪柯玉の生年は、「法書題跋」卷一七「贈汪君源崑号玉水序」の文中にある「余十七而冠、值萬曆癸卯（三十二年・一六〇四）季冬穀旦」という本人の記述から逆算したもの。

⑥6 李肇亨（一五九二—一六六二）、字は会嘉、号は珂雪。この人物については後に触れる。

沈季友「稿李詩繫」卷二〇「李太学肇亨」

肇亨、字會嘉、號珂雪、九疑先生子、與掃庵同主駕社。

⑥7 譚貞默（一五九〇—一六六五）、字は孟恂、天啓四年（一六二四）に舉人となり崇禎元年（一六二八）に進士に及第。その履歴については屠存智の伝に詳しい。嘉興秀水の譚氏は、明初より続く「望族」で、明末には同郷の項氏・朱氏・李氏をはじめ、蘇州の申時行とも縁戚關係を結んでいる。（龔二〇一一）卷下、六七九—六九三頁を参照。

『嘉興譚氏家譜』卷五、屠存智「掃菴公傳」

公諱貞默、字孟恂、曾經魏樓傾壓、以梁庇獲免、更字梁生、別號掃菴、姓譚氏。…（中略）…天啓甲子、中順天鄉試、同鄉公卒於官、扶柩南還服闋、舉戊辰進士、筮仕工曹、進朝鼓頌、營葬鄭太妃、所省不貲…（中略）…公創結駕湖社、羣禾中前後輩及海內寓公、方内外、黃冠衲子而爲詩、高人勝士一時萃集。其會期必良辰美景、其製題必典古麗、則風雅之盛不減建安。…（中略）…康熙四年五月朔卒於研山之著作堂、春秋七十有六。

⑥8 李日華『恬致堂集』卷一五「駕水月社編序」

駕水有社，倡於譚梁生，而成於汪玉水諸君。梁生以飛丸戛劍之雄，時其囊翻未奮，小寄意於搶榆枋飛間，而玉水諸君，適協其暢神弄藻之思，則相與結壘擐甲以應之。

⑥9 「名画題跋」卷一九「霞上宝玩」

萬曆甲寅重九後，余設湯餅會。坐客出是冊，爲真功甫物。余以玉卮一、犀觥二易之。項又新、程季白俱欲此前後數幅，而未能奪余好也。

⑦0 「法書題跋」卷一六「祝京兆書聞絃詩軸」

余嘗攜此幅於白下，戊午春，懸三山草堂，小集諸工音律者，爲關中姜還樸七絃，婁水張聘夫三絃，蕪臺徐質世二絃及陳玉素四絃，東曲大小雪二十五絃。一時聲傳九陌，余因步祝韻紀之。及今追憶猶自盈耳。

⑦1 「名画題跋」卷九「方上清碧水丹山」

詎意，丙辰冬，鄉人不戒于火，延熟吾家，凝霞閣畫首亦燼去，得蒼頭畢官嗣惠泉一盪而熄。至明，付陸象玄裝潢，竟遺失水池一宿化爲烏有。豈上清神丹，餘紙故入水火二煉耶。抑功甫仙遊所及，復取還芙蓉城耶。可憾也。萬曆丁巳春，玉水汪柯玉識於花噴齋。

⑦2 盛楓『嘉禾徵猷錄』卷一五「太常寺」一

道素，原名斗光，字明水。：（中略）：遂更名道素，字玄期。己未，登進士。：（中略）：授虞衡主事，調營繕，偕太監黃用監造桂郎。：（中略）：及逆阹趣瑞、惠、桂三王同時之國，始倉皇給辦，期半載竣工。於是分界督造，道素任承運殿以外，用任寢殿以內。邸成，遷屯田郎中。崇禎己巳，用所督寢宮之前殿圯，壓斃宮眷，辭連及道素，論死。『崇禎紀畧』，桂王府第棟梁皆不堪，一夕大雨後，殿數帶俱傾，壓死宮眷百餘人。後每遇風雨，王必露立庭中，深慮覆壓之懼也。

⑦3 「法書題跋」拾遺「淳化閣帖無銀錠本」

丙戌中秋，余止角里清露閣東，與居停主高君看舊時月色，出淳化無銀錠本示余云，「是其家玄期所遺。」玄期與余自幼金石交，知其精于鑒古。

⑦4 「法書題跋」卷一八「江岡赫驥名蹟」

萬曆壬寅間、明水君即與愚父子相契、斗酒論文、聯床夜話。

⑦5 「法書題跋」卷一八「江岡赫驥名蹟」

彼此獲一佳玩、相賞或互易。

⑦6 それぞれ順に、「法書題跋」卷一二「無款五言一律」・「名画題跋」卷九「又水石竹枝幅」・同「陸天游谿山清眺」所収。後に高道

素の子の高承埏（字澤外、號寓公、崇禎十三年（一六四〇）の進士）は、父の仕事に落ち度が無かったことを上奏し、名譽回復に成功した。高道素とその息子、明末の大蔵書家としても著名な高承埏のコレクションについては、〔藤本二〇〇八〕一九九―二〇一頁に詳しい。

⑦7 『西子湖拾翠餘談』の書誌情報については、後述の第一章第四節を参照。

汪何玉『西子湖拾翠餘談』卷中「虎林西山諸勝」

自萬曆癸卯秋孟、爲試事到杭。

⑦8 「法書題跋」卷一六「枝山書語怪錄」

萬曆壬子秋、予應試留都、得祝子『寧知錄附志怪』五卷、乃曾孫化甫所鐫、云尚有續編失去、而予家竟獲之、可稱合璧也。

⑦9 「何炳棣一九九三」二二三―二三〇頁によれば、明代後半期における経済的・文化的発達を背景に、当時の省別進士合格者数は、

浙江が全国一位、江蘇（南直隸）が二位を占めたが、その分、競争率も高かった。

崇禎『嘉興縣志』卷一二「附例貢」

汪何玉、運司經歷。

⑧0 「法書題跋」卷四「蘇文忠公手書唐方干詩卷」には天啓三年（一六二三）の初夏に北京へ発ったとあり、李日華『恬致堂集』卷

一五「瀋水月社編序」には、「梁生北上登賢書、玉水以明經貢稱選人」と、譚貞默が北京の郷試に赴いた天啓四年（一六二四）には候選の官員となっていたことが述べられる。

「法書題跋」卷四「蘇文忠公手書唐方干詩卷」

天啓癸亥初夏、獲觀是卷及漢玉天熊、爲王越石物。余時匆匆北征、以方詩無刊錄而返之、不及細玩。

李日華『恬致堂集』卷一四「汪玉水詩稿序」

余姻友汪玉水君、居恒焚香掃地、讀書臨帖、藝竹灌花、退然以雅靜自詆、而近以尊公命、遊上國、勉從祿仕、期有以樹立、爲不負當年。玉水欣然就道、而古錦囊所投句、則視齋居竹樹間更饒也。

⑧ 第一章第四節にて後述する『西山品』の文中において、中書舍人の姜神超なる人物から「恩榮之餘饒」を受けたとあり、任官に際してはこの人物の推挽があつた可能性がある。

汪阿玉『西山品』

適姜中秘神超、惠我以恩榮餘饒。

⑨ 「名画題跋」卷一八「吳中翰写自韻子小影」。五代の頃、吳越国王を称した錢鏐が、胡岳の肖像画を見て、「面に銀光有り、奇士なり」と言い、直ちに引見した故事による（『方鎮編年』所載）。

「名画題跋」卷一八「吳中翰写自韻子小影」

噫、余非銀光面、安能應圖索駿耶。姑對影蒙天而一笑。

⑩ 盛楓『嘉禾徵猷錄』卷四六「文苑」宋鳳翔

是時江左殷富、而令甲非進士不得躋顯要、皆屈首揣摩。

⑪ この点について、『何陋錄一九九三』は、第一章「社会イデオロギーと社会階層」において、「土木の変」終結後の一四五一年以降、財貨それ自体が究極の権力源とはなり得ず、それを利用して官僚の地位を獲得することが、社会的地位を決定する重要な要因であつたことを述べる。

⑫ 李日華については、『井上二〇〇〇』および『万二〇〇八』を参照。李日華の号である「竹懶」は、史料によつては「竹懶」とも表記されるため、引用文中においては原表記に従つて示す。

⑬ この兄弟のうち、李日華の門人であつた石夢飛は、『味水軒日記』をはじめ『六軒齋筆記』や『恬致堂集』など、李日華の著書にその名が頻出するが、詳しい経歴は不明。李日華は、石夢飛の所蔵する褚遂良《書文皇哀冊文》真蹟、文徵明《楷書千字文》真蹟、

宋拓《九成宮醴泉銘》、北宋の諸家の作品を収めた《画卷》に題跋を附しており（いずれも『恬致堂集』巻三七「題跋」所収）、石夢飛が書画の名品を数多く収集していた様を伝える。

87 『味水軒日記』八巻からの引用は、民国十二年（一九二三）刊の吳興劉氏嘉業堂刊本による。

李日華『味水軒日記』巻六・万曆四十二年二月二十八日条

同石夢飛、夢紉昆季、兒子亨，造南郭汪愛荆東雅堂。堂前松石、梅蘭列置楚楚。已入書室中，手探一卷展視，乃元人翰墨也。首頓仿小米雲山，樹行欹疎，風氣滃鬱，當是房山一輩人而無欸。後有楊鐵崖・趙奕等雜手筆數通，亦佳。已登墨華閣，列大理石屏四座、石榻一張，几上宋板書數十函、雜帖數十種、銅甌、花瓶、疊洗之屬。汪君所自娛弄以絕意於外交者也。

88 馮夢禎（一五四六—一六〇五）は、字は開之、浙江嘉興の秀水の人。万曆五年（一五七七）の会元で、官は南京国子監祭酒に至る。《快雪時晴帖》や《江山雪霽圖》など、書画の名品のコレクターとして知られ、李日華も諸生の時代から門下にあつて賞鑒家としての研鑽を積んだ。また、禪学にも深く通じ、紫柏達觀・雲棲株宏・憨山德清ら、當時を代表する名僧たちと交友關係を結び、

『嘉興歲』の出版に尽力。錢謙益「南京国子監祭酒馮公墓誌銘」（『牧齋初學集』巻五一「墓誌銘」二所収）ほかを参照。

李日華『味水軒日記』巻六・万曆四十二年二月二十八日条

愛荆少時曾與黃冠王雅賓游，故得嗜古之趣。雅賓文衡山先生門下士也。汪之長子玉水遊太學歸，與石氏昆季同里，余因得相引以入。玉水又導余入一密室，見桐高四尺・潤五尺，以紗蒙隔，中貯烏思藏佛大小百餘軀。又白定宣磁數四，瑪瑙彌勒尊者一，頭腹俱瑩白而衣紋紅纏絲皆就生質琢之者。又白玉觀音一，高八寸，手提籃一紅鱗，乃瑪瑙所琢者。憶昔年華亭徐文貞公家紀綱之僕，捨多寶營佛事。曾介一僧求先師馮具區先生作文，以此爲潤筆。余爲代草，而觀音留供先生書室中，不二月失去，莫可踪跡。今忽覩此如逢故人。而旁添一善財，則他玉所琢，頭白背膊俱白，而腰褰裳衣乃藍色，亦奇品也。

89 崇禎『嘉興縣志』巻一四「詞翰」附「画家」

山人王復元，號雅賓。幼爲黃冠，得事文徵仲先生，稔其議論風旨，因精鑒古。先生歿，來棲禾城，矮屋數椽，僅蔽風雨。每日獨行闔肆，遇奇物佳玩與繡索之蹟，即潛購之，值空乏，褌衣典質不惜也。歸乃杜門諦繹，呼酒自快，或數月不出。既厭，亦時出以易豪貴金錢，終歲取給於此，資未盡，不輕竊一物也。

⑨⑧ 李日華『味水軒日記』卷六・万曆四十二年二月二十八日条

初愛荆巧董太史書堂扁，董詢其居東向，因命之東雅。見者頗疑其無據。余是日，適攜名公雜札一卷，就堂中觀之。有彭隆池年與張元洲柬，云，軟輿暫赴東雅堂，當有奇觀之語。玉水因大彭暢以爲千古之合云。薄暮，石氏攜酒榼至痛醉而別。霜月滿空夜，漏下五十刻矣。

⑨① 李日華『味水軒日記』卷六・万曆四十二年二月二十四日条

汪玉水以《鵲遊亭楮書帖選》見貽，乃溫陵黃克纘紹夫所鑄也。自鍾元常迄文徵仲凡二十二人，內蔡端明楷而不能小，蘇子瞻米元章小而不能楷，而王洽、王虞輩則又雜取行狎書以足之。將毋諸公之各有擅而不相通耶。抑紹夫披羅之未廣耶。

⑨② 李日華『味水軒日記』卷八・万曆四十四年三月一日条

汪玉水同夔甫、鳴甫攜示趙子昂行書《光福寺碑記》真蹟。有梅梁馬蘊收藏印記，精品也。又管仲姬著色《閨蘭》陸幅，舊有子昂小楷書《蘭賦》，脫去，文徵仲補之。有陸源、沈啓南諸人跋，不及錄。

⑨③ 李日華『味水軒日記』卷八・万曆四十四年六月三日条

同石氏考鴻昆季過汪玉水齋頭。閱商鼎一，文鼎一，俱青翠徹骨，可愛。趙子昂《唐馬》，未真。文衡山《夜泛赤壁圖》，陳白陽草書賦，俱真。又陸五湖《覽勝圖》，筆意仿子久，而秀潤異常。五湖畫不多見，益覺知希之貴。又項子京爲三塔僧鑒慧作《行腳圖》長卷，蕭灑秀逸，與元徐幼文、曹知白相頡頏。自子京沒，而東南繪事日入繆習，嗜痴者方復崇之，甚可歎也。一時謹譁之口，可以簧鼓千古，目豈盡可瞞哉。

⑨④ 李日華『味水軒日記』卷八・万曆四十四年八月二十四日条

從汪玉水再假過《石湖春曉卷》展閱，錄得彭隆池《冬遊石湖記》。

⑨⑤ 汪硯玉は「法書題跋」卷一八「江岡赫驥名蹟」に、「太僕公の婚啓は已に『恬致堂集』の中に刻す」と附記して、李日華の「婚啓」が「恬致堂集」に収録されたと述べるが、現存する刊本には見えず、同書卷三二に「答汪氏札書」を収めるのみである。

「法書題跋」卷一八「江岡赫驥名蹟」

令郎嘉禮，一媒遠，一媒多事。所幸我兩家相知之，素言語可以竟達鄙意，一以簡靜爲主。粗蠶數事，以一舟達潭府。所遣僕輩

不煩稿宴、即尊使寵臨亦不及奏款矣。亦迫於時日、勢不能紆徐也。

⑨⑤ 汪成淵については、字号や生没年など、詳しい履歴は不詳。他の記述には「淵兄」、「兒淵」などの形で登場する。

「法書題跋」卷一「褚河南書枯樹賦真蹟」

崇禎辛酉春仲、訪友玉峯婁水間、花生日、與成淵兄過東倉楊棘丞汝邁、攜遊王氏雜花林返、飲深柳堂。

⑨⑦ この「嘉興臬志」二四卷は、天啓四年（一六二四）一〇月、知臬の湯齊によって一旦完成していたが、後に黃承吳らによって改定・増補が行われ、成書は李日華没後の崇禎一〇年（一六三七）であつたため、崇禎「嘉興臬志」と呼びならわされる。崇禎「嘉興臬志」巻首「修志申文」および「統修志呈」を参照。

⑨⑧ 「法書題跋」巻一八「江岡赫號名蹟」には、「篤社」の同人で編纂担当の黃承吳からの書簡が収められており、この間の事情を伝える。なお、書簡中に出てくる祖父の汪頤が重建したとされる「三元閣」は、崇禎「嘉興臬志」巻七「寺觀」に、蓮花橋・醋坊橋はいずれも同書巻三「橋梁」に収録されるが、同書巻五「古蹟」には見られず、汪頤との関係も記されていない。

「法書題跋」巻一八「江岡赫號名蹟」

向蒙左顧、偶往召上、有失倒屣。所論尊公大傳、業經付梓。佳什前從洪善之處領教一二、亦已借重、今再當更添刻、以爲邑乘光也。崑此覆。承吳頓首。

黃閣齋廉憲纂修嘉邑誌。予爲先大父明夫重建三元閣、葺夷光學繡處、蓮花醋坊諸橋補入古蹟。先愛荆居士之高行、如朱文恪公所叙、李岡卿君實所傳、姑撮一二附隱逸、即蒙如請。…（中略）…不一。社弟谷頓首。

⑨⑨ 嘉興の李氏一族の系譜、および同郷の「望族」との婚姻関係については、（龔二〇一一）巻中、四五七—四六二頁を参照。汪氏との婚姻についても触れられており（四六一頁）、汪氏が嘉興の「望族」である李氏の縁戚となつたことを記す。

⑩⑩ 「濱島二〇二四」一〇六—一〇八頁および二〇一—二〇三頁を参照。

⑩⑪ 「井上二〇〇〇」一七一—二三頁を参照。

⑩⑫ 「濱島二〇一四」一〇七頁を参照。

⑩⑬ なお、「何炳棣一九九三」第四章「下降移動」一五八—一六五頁において、書画骨董の収集と鑑賞をはじめとする士大夫の「エ

リート趣味」のための浪費を、財富の希薄化とそれに伴う社会的・経済的没落の要因として論じている。

⑩④ 「名画題跋」 卷二 「国朝名絵大冊」

是冊、雲東而下、即石田、白陽諸畫、九疑翁所云十五幀也。後爲徵仲、伯虎諸筆、又幾十五幀。款題未錄。其墨林梅花幅、有竹懶水邊林下、跋已刻集中矣。余時得周服卿花鳥六板、足掩宋人色韻、因附入之。天啓丙寅秋、余在都門、聞先子以此冊共諸玩好質於珂雪姻家。內有白玉大士、高尺餘兩、玉侍高半之、琢綠松爲岩座、乃宋做最精工者。太僕公嘗云、玉像係馮具區先生所珍供焉。迨余東歸費繁、竟不及取贖、殊軫念也。然猶幸不落生面人及俗漢手。

⑩⑤ 「法書題跋」 卷二 「跋竹深処卷後」

無何、余自歷下還東垞、庭中紫篠數百個、盡爲人所戕、而此卷亦失去。

⑩⑥ 「法書題跋」 卷五 「黃涪翁正書法語真蹟」

今擬北游、恐培灌失課、如天啓丁卯之變、致枯瘁不少、遂割愛易去。

⑩⑦ 「法書題跋」 卷八 「趙承旨書光福重建塔記真蹟卷」

未幾、余重罹不憫、君實太翁同珂雪親家米奠款、

⑩⑧ 李日華『恬致堂集』卷三三「祭汪愛荆太翁文」

奈何一疾、遽歸蓬嶺。

⑩⑨ 「名画題跋」 卷一九 「韻齋真賞」

崇禎戊辰春、爲先人窆厝費、因出家藏書畫、宋元代名蹟各百餘冊、卷軸稱是、并虎耳簪、雉卣、漢玉、犀珀諸物、易質襄事。

⑩⑩ 「名画題跋」 卷一八 「項子京荆筠圖卷」

不意、崇禎戊辰春、遭内外艱、營殯事、典質古玩。

⑩⑪ 「名画題跋」 卷一七 「汪南溟司馬肇林社記」

後余在東省遭艱、被宵人露鷲頭物。

⑩⑫ 「黃山の獄」とは、天啓年間に魏忠賢が引き起こした、三度にわたる疑獄事件の総称であるが、汪何玉が一族もろとも巻き込まれ

た可能性が高いのが、天啓六年（一六二六）に発生した第三回目の事件、すなわち徽州の大家族の一つ「溪南の呉氏」の家産相続を巡る紛争に魏忠賢が介入し、巨額の資産を収奪して激烈な「民変」を引き起こし、その影響が徽州のみならず江南各地にまで波及した事件である。その概略については（鈴木一九九八）を参照。

⑬ 第三回目の「黄山の獄」に連座して獄死した人物の中に、程夢庚（字は季旦）がいる。彼は、明末の徽州におけるコレクター一族として名高い「榆村の程氏」の出身で、嘉興にも活動拠点を置いて、李日華や汪何玉らとも親しく交際した人物であった。筆者は今後、中国国家図書館所蔵の程國棟纂修『休寧榆村程氏族譜』一〇巻・首一卷（乾隆二年（一七六〇）刻本）、内閣文庫所蔵の程夢庚『秦漢文準』一二巻（万曆四四年（丙辰・一六一六）序刻本）、汪何玉『珊瑚網』、李日華『六軒齋筆記』・『紫桃軒雜綴』などの記述に基づき、程夢庚とその一族の事跡、および「黄山の獄」が汪何玉に及ぼした影響などについて、別稿にて論じる予定である。

⑭（井上二〇〇六）一五一―一六頁を参照。

⑮ 「合浦珠還」とは、後漢の孟嘗が、かつての真珠の産地であった合浦で善政を行い、その生産を復活させた故事を指す（『後漢書』孟嘗伝）。

「法書題跋」巻八「趙承旨書光福重建塔記真蹟卷」

先荆翁習學業時、即得趙書光福碑記、置墨牀筆格間、時一展玩也。己未春、董太史過余舍、因觀此卷、著數語。…（中略）…乃余竟爲殯事所需、輒諸藏玩并去趙跡、至今猶懷先澤之不存也。第卷留汪氏印記爲可驗、他年子孫或有購之者、未知得合浦珠還否。時值崇禎癸酉秋。

⑯ 崇禎『嘉興縣志』巻一二「附例貢」

所著有『古今證略』、『吾學續編』、『名蹟珊瑚網』、『皇明詩話』、『燕都西山品』、『香古月牋』、『蒙天咲』、『弄石漫興』、『石疏』、『梅花供』、『玉葦新節』、『玉版新叢』、『樹石異綴』、『駕水月社篇』、『女將疆史』、『女戎閩史』、『尋香典』、『花影篇』等書。

⑰ この人物については、現時点で詳細は不明。黄虞稷『千頃堂書目』巻八に、許侑如の著書として『秀州百詠』を載せる。

⑱ 天啓乙丑歲伏日に著された李日華『西山品叙』は、李日華『恬致堂集』巻一三に「汪衆卿西山品序」と題して収録される。

⑪ 劉允繩（生没年不詳）は、嘉興の人で、万曆三二年（一五九四）の挙人、官は広東廉州府同治に至る（乾隆『浙江通志』（乾隆元年（一七三六）序刊本、全一八〇巻）巻一三九「選舉」一七「明」挙人ほか）。序文には、「玉水之翁愛荊公、石隱高尚、恂恂謹愿、有古君子風。至其博覽嗜古、神識賞鑑、殆天授哉。架上金石、寶繪、墨跡及繡囊錦帙、所獲不甚侈、而特得驪龍之珠。一時搢紳名士交臂而友之。」とあり、汪繼美との交友を述べる。

⑫ 程于古（生没年不詳）については、雍正『広東通志』（雍正九年（一七三二）序刊本、全六四巻）巻二七に、肇慶府通判として程于古の名が挙げられ、「浙江秀水人、貢生」と記す。

⑬ 項真（生没年不詳）は、字は不損、秀水の儒学生で、貢生として国子監に入った人物（朱彝尊『静志居詩話』巻二〇）。「篤社」の同人で能書家としても知られ、著書に『甌園詩稿』・『喬松山房稿』などがある（崇禎『嘉興県志』巻一四「詞翰」）。『西山品』跋には「姻弟」とあるが、汪氏とどのような婚姻関係にあるのかは不詳。序は天啓乙丑八月に著されたもの。「法書題跋」巻一八「江岡赫驪名蹟」所収の書簡には、病臥中に「西山品」の原稿を読んで序文を執筆したことが述べられ、序文に「今年夏、余率率至長安、便挈一二良友謀首此勝游。會炎歊蒸燦、不果于邁。入秋善病、從事藥餌、蹉跎久之」と記す内容とも一致する。

「法書題跋」巻一八「江岡赫驪名蹟」

臨病經旬、思腸遂棄。讀老親翁『西山品』、覺朝來實氣、落我床褥、不惟病中、可當七發。後日遊覽、挾茲以往、庶可無迷津矣。漫題數語、不足形容、萬一聊以見服膺之意、惟鄂削付梓乃可耳。弟真拜上。

弟既乏玄晏之文、深慚無換鷲之筆、草草應命、錄上希檢。到玉翁老親家詞伯。弟真頓首。
項不損、爲吾郡書家龍鳳。惜其作李北海盡頭耳。

⑭ 洪元基（生没年不詳）は、嘉興平湖の人で、宋の洪皓（忠宣公）の末裔の洪丞（字は惟進、号は鵬洲、隆慶五年（一五七二）の進士）の従子。洪邦基（生没年不詳）は、字は慶之、洪丞の子（以上、崇禎『嘉興県志』巻一二「選舉志」舍選）。文章をよくし、小楷に巧みであつたとされる人物。盛楓『嘉禾徵猷録』巻四「吏部」下には、洪丞の子で同じ輩行の洪世基（字は爾濟、號は弱生、萬曆庚子（二八年・一六〇〇）の挙人）と弟の洪紹基（早世）の伝を載せる。

「法書題跋」巻一八「江岡赫驪名蹟」

慶之、爲忠宣公後、能文、工小楷。

⑫ 戴岳英と項震については、現時点で詳細は不明。

⑬ 『北京図書館古籍珍本叢刊』第五八、および『四庫全書存目叢書』史部第二七五冊に、影印本が収められている。なお、(杜二〇〇一)安徽省卷には、『古今鏤略』九卷、『古今鏤略補』九卷が挙げられ、『明崇禎安徽省歙縣汪何玉刊本』とあり、刊本の存在を伝える。

⑭ 汪何玉『古今鏤略叙』

未三月遽連遭閔凶、不得少參末議。

⑮ 汪何玉『古今鏤略跋』

西吳秀邑南薰里人玉水汪何玉源崑甫手輯、崇禎壬申春、服闋無資、補原職伏莽。

⑯ 第一章第三節に前掲の註⑩に所引の「法書題跋」卷五「黃浩翁正書法語真蹟」を参照。

⑰ 「名画題跋」卷七「錢雪川醉女仙卷」

癸酉春、效米家書畫船、訪舊於玉峰婁水間。回值、霽古者示方鼎色如翡翠、意欲得此四圖并名筆妙筆十握、成窑五色盤盃及埴玉種種、遂舉易之。未幾囊空、將鼎共宋畫百冊質姚尚書岱之處。意若有所失、然四圖幸有臨本。

⑱ 明末清初における社会的「身分感覚」については、『岸本二〇二二』を参照。なお、筆者はかつて、『井上二〇〇六』一三頁において、李日華が書画骨董商人の汪越石を指して「書畫友」と表現したことを挙げ、これを「書画の友」と読み、両者の間に書画の鑑賞と取引を通じて、士大夫と商人という身分の違いを超えた親しい友情が存在していたと解釈した。ところが、その中文訳である『井上二〇一三』四〇七頁の註四三において、この場合の「友」とは「幕友・工友」、すなわち秘書や使用人という意味で解釈すべきである、との指摘を訳者から受けた。この指摘と『岸本二〇一二』の所論を踏まえれば、明末の社会にあつては、士大夫と商人との身分上の格差は厳然として存在しており、『井上二〇〇四』五六―六一頁で述べたように、書画骨董商人が士大夫のコレクシヨンの指南役を務めるような事態が生じるのは、あくまで明清交替の動乱に伴い、身分に対する人々の意識の上に大きな混乱と変動がもたらされた後である、と理解すべきであつた。よつて、この場を借りて前記の解釈を訂正すると共に、重要な指摘を与え

てくださった訳者に対し、心より謝意を表したい。

⑬ 「名画題跋」 卷二 「摩詰句図」

余嘗得蔡虧父所彙畫冊，俱寫右丞詩意，以摩詰詩中有畫也。廼吳下諸先哲，則畫中有詩矣。因憶，都中數年，每見吾未諸君子點染之好，竊謂東吳一帶不能專嫩。余不揣，敢遍求鉅筆一啓。輒川遺韻絕勝，白香山者，刻句盈肌乎。藉是以開就李崇禎畫社，庶令梅道人、姚侍御諸公，不至久落莫也。勿靳吮毫而夷鄙人之請幸甚。社走汪阿玉拜徵。時戊辰改元之秋。

⑭ 蘇軾「東坡題跋」 卷五 「中國書畫全書」 第一冊（上海書畫出版社，一九九三年）所收本 「書摩詰藍田煙雨圖」

味摩詰之詩，詩中有畫，觀摩詰之畫，畫中有詩。

⑮ 下永晉「式古堂書畫彙考」 （『文淵閣四庫全書』所收本，全六〇卷） 卷三七 「明人詩意圖冊」

王中允之詩，詩中有畫。吳下諸君之畫，畫中有詩。虧父攜以自隨，如日坐少文之室，聽衆山皆響也。萬曆己亥二月既望，王穉登書。

⑯ 「法書題跋」 卷一八 「江岡赫臙名蹟」

鶴社雖已粹，而一時同盟賤玉頗多，茲僅存譚帶菴者以始事之人，及姚叔祥者爲塵遠之續，且兩君兼工書耳。

⑰ 「法書題跋」 卷一八 「江岡赫臙名蹟」

項君首寫「摩詰句圖」，余假以韓滉畫卷臨倣，一時雅韻足記。乃孔彰近來書學與畫學俱進，故誌之。

⑱ 「名画題跋」 卷二 「摩詰句図」 に、字は玉洲、実父（仇英の字）の孫であると記す。この人物の詳細については現時点で不明。

⑲ ここまでに挙げた人物のうち、項聖謨・李肇亨以外で履歴が判明するのは戴晋のみである。戴晋は、字は康侯、嘉興の牆頭村の人。幼くして孤児となつた彼は、叔父の戴顓が項夢原（項元汴の次兄 項篤寿の次男）と親しかつた縁により項氏家蔵の書画を閲覧したことで、画家として大成したという人物であつた。後に、嘉興の精嚴寺の僧坊に寄寓し、僧の智舷（号は秋潭、精嚴寺の僧で詩文書画に優れ、李日華・董其昌・陳繼儒らと交友）や書家の高松声（号は元雅、当時、一族から書法に優れた人物を多く輩出）らと交友關係を結び、孤高絶俗の生涯を送つた。乾隆『浙江通志』卷一九二「人物」一〇「隱逸」上に所収の伝を参照。

⑳ 図版が小さいため確認が困難だが、作者の姓はそれぞれ劉および陳であろう。

⑬ 北京故宮博物院所藏の《王維詩意图》は、『中国古代書画図目』一（文物出版社、一九八六年）二七五—二七六頁（京一一二九一〇）にてモノクロ図版を見ることが出来る。また、上海博物館にも同じタイトルを有する画冊があるが、こちらに取められた二二点は、全て項聖謨の作品であり、董其昌・陳繼儒・李日華の題跋が附されている。成立年次や《摩詰句図》との関係は不詳。『中国古代書画図目』二（文物出版社、一九八六年）一〇二—一〇五頁（滬一一一九七三）を参照。この作品と作者の一部に関しては、〔万二〇〇八〕第二章「嘉興地区的画家」七六—八一頁も参照。

⑬⑨ 「名画題跋」卷二二「摩詰句図」

余幼見先君選古文辭可圖者，索姑蘇諸名手書畫於泥金牋上，曰《桂苑叢珠》，較此更光彩陸離也。

⑬⑩ 「名画題跋」卷二二「周服卿名花十二冊」

先君早年即交吳下諸君子，徵其書畫，有《桂花叢珠》及諸卷軸、便面。…（中略）…戊辰春，徽友吳集之來齋頭，欲得《叢珠》冊及少谷、休承二冊并他玩好。余時爲先慈喪事費，不能秘作世傳。又點蒼石屏，名《春山欲雨》者，共古梅兩大樹悉售之。可念也。

⑬⑪ 明末の山人とその活動については、〔金二〇〇二〕を参照。

⑬⑫ 汪何玉『西子湖拾翠餘談』卷下

崇禎庚午秋，多士試會城。淵兒雖幼冲，亦樂觀其盛況，西湖風景時切夢懷，遂於八月十三日，攜兒下舟。

⑬⑬ 汪何玉『西子湖拾翠餘談』卷下

二十日，…（中略）…飯後同兒入城至貢院前。

⑬⑭ 汪何玉『西子湖拾翠餘談』卷下

歸後至廿八日，浙闈揭曉，吾宗諱挺者得雋。

⑬⑮ 汪何玉『西子湖拾翠餘談』卷下

兒時初學，已詣杭觀場，因與其師張君又緒夜酌。

⑬⑯ 汪何玉『西子湖拾翠餘談』卷上

乙酉兵火後、余著作多散失。茲存僅此聊札、之以自娛而已。

⑭⑦ 汪何玉『西子湖拾翠餘談』卷上

崇禎癸酉夏、爲淵兄應試會城、偕寓湖上畫中樓。

⑭⑧ それぞれ李日華『恬致堂集』卷一三・一四所収。

⑭⑨ 汪何玉『汪氏珊瑚網古今法書題跋叙』

余也自幼趨庭、見先翁所藏書畫、心竊儀之。壯而於知交間得掌錄名迹、以至老積有廿餘帙矣。

⑭⑩ 汪何玉『汪氏珊瑚網古今法書題跋叙』

雖海人鐵網取珊瑚、亦不過是。

⑭⑪ 汪何玉『汪氏珊瑚網古今名畫題跋叙』

余更欲揮鐵如意、碎却七、八尺以下珊瑚枝、將網以彌羅碧金絲、有火齊、木難相錯、區區尋常著語焉乎。

⑭⑫ 『珊瑚木難』・『鉄網珊瑚』は、いずれも明刊本が現存していないため、もし汪何玉がこれらを参照していたとすれば、抄本として

流通していたものを入手して閲読していた可能性が高い。

⑭⑬ 余紹宋『書畫書錄解題』卷六・第六類「著錄」・四「鑒賞」

其書大體仿『珊瑚木難』所收既弘、遂爲後來賞鑑家所不可廢。

⑭⑭ 『四庫全書總目提要』卷一三「子部」二三「藝術類」二

然丑之二書、前後編次歲月皆未明析。何玉是書、則前列題跋、後附論說、較丑書綱領節目、秩然有條。

⑭⑮ 余紹宋『書畫書錄解題』卷六・第六類「著錄」・四「鑒賞」

至「書憑」、「畫據」、搜集諸家所藏書畫、目前無所承、實爲創格、尤可爲參攷之資。惜所收未廣、且乏考證耳。其後李調元作

『諸家藏書畫簿』、大體即襲此兩卷而成。

⑭⑯ 汪何玉『汪氏珊瑚網古今名畫題跋叙』

余即無文、籍往昔以文。

〔古原一九九〇〕一三八六一三三九〇頁を参照。

〔古原二〇〇三〕を参照。

〔古原二〇〇三〕を参照。

〔古原二〇〇三〕を参照。

余生江南，幸值太平之世。游諸名公家，每每出法書名畫，燕閑清畫，共相賞會。因錄其題咏，積數十年，遂成卷帙。然間值客舟旅邸，雖遇唐宋真蹟，或筆墨不使，則付之雲烟過眼而已，未嘗不往來於方寸也。時崇禎七年，自春徂冬，集爲十二卷，乃記於後。水西道人郁逢慶識。

〔古原二〇〇三〕を参照。

初得是編，繼得續編十二卷。：（中略）：逢慶，姓郁氏，字叔遇，別號水西道人，嘉興人也。康熙己巳重午日，休陽汪森題。

余紹宋『書畫書錄解題』卷六・第六類「著錄」・四「鑒賞」

而後集則並書畫、種類、印章等多不記錄，似有由他書轉錄成之者，非盡出於目睹。

ただし、前集の一〇卷以降、後集の一〇卷以降は、いずれも明人の書画についての記述が一括して纏められている。しかしながら、作者・時代順とはなっていない。

〔四庫全書總目提要〕卷一三三「子部」一三三「藝術類」二

而皆未註某爲所藏，某爲所見，體例尤不分明。特以採摭繁富，多可互資參考者，故併錄存之，備檢閱焉。

以上に述べた、『郁氏書畫題跋記』に関する書誌情報については、〔謝一九九八〕卷五、四一七一四一八頁を参照。

〔法書題跋〕卷一八「江岡赫驍名蹟」

伯承博雅好事，玄鐵稱之爲「貧孟嘗」、與季叔遇俱余忘年交。叔遇至今神明不衰，每示所錄題跋也。

下永著『式古堂書畫彙考』卷五三「釈本誠覺隱詩画合卷」

余藏覺隱《山水》一軸，似米家山與方方壺奇峰白雲，作對懸之草堂。今復見此卷，昔年熟玩於郁白承氏，採入『太平清話』中矣。：（中略）：陳繼儒。

⑬ 「法書題跋」卷五「黃涪翁正書法語真蹟」

昔年郁伯承嘗勒石，今竹懶翁假閱著語，然未題卷，意將面商之耳。奈未幾受貧累，復質好事家，可勝惋惜。

⑭ 李日華『紫桃軒又綴』卷二

郁伯承名家子，喜結客收書，家亦以是盡。山人與元鐵常主其家，元鐵擁曲木几，摩樹根爐，笑曰，「余真富黔婁，伯承乃貧孟嘗也。」人以爲實錄。

⑮ 第一章第四節に前掲の註⑬に所引の、汪柯玉の著作目録を参照。

⑯ 『停雲館法帖』と蘇州王氏による法帖刊行事業については、〔増田二〇〇三〕を参照。

⑰ 郁逢慶『郁氏書畫題跋記』卷四「梁楷畫右軍書扇圖小卷」

右宋梁楷東平相義之後，畫院待詔，賜金帶不受，掛於院內，嗜酒自樂，亦號梁風子。但傳於世者皆草草，謂之減筆。今觀此水墨題筆圖，所作右軍立枯柳傍，丰神俊邁，筆意蕭爽，老嫗持扇，俯偻有欣悅之狀，想是賣扇後復來耳。畫在白宋紙上，濶二尺許，高不盈尺。天啓七年龍集丁卯十一月長至後三日，水西道人識。

⑱ 「名畫題跋」卷六「梁楷畫右軍書扇圖小卷」

梁楷東平相義後，嘉泰年，畫院待詔，賜金帶不受，掛於院內，嗜酒自樂，亦號梁風子。但傳于世者皆草草，謂之減筆。今觀此水墨題筆圖，所作右軍立枯柳傍，丰神俊邁，筆意蕭爽，老嫗持扇，俯偻有欣悅之狀，是寫賣扇後復來耳。畫在白紙上，濶二尺許，高不盈尺。天啓丁卯長至日，課花外史觀於東雅堂中。

⑲ 郁逢慶『郁氏書畫題跋記』卷二「米西清雲山小卷」

在澄心堂紙上，畫長丈餘，宋裱。雲山細潤，出諸卷之上。卷首一圓印，朱文「芝山」二字。崇禎丙子四月望後二日，觀於周敏仲舟中。

郁逢慶『郁氏書畫題跋記』卷一「趙承旨停琴撥絃圖」

重青綠雲山，巖下正面坐一高士，葛巾深衣，背面坐一高士，黑角冠撥絃。右有大松二樹，樹旁童子爲髻大袖，雙結手捧石榴一盤。山足多鹿，蔥花樹根。樹旁子昂細楷款。

⑬ 「名画題跋」卷四「米西清雲山小卷」

宋棣，畫在澄心堂紙上，長丈餘。雲山細潤，迴出諸卷。卷首一圓印，朱文「芝山」二字。周敏仲從新安汪景純家得之。崇禎丙子四月望後二日，觀於舟次。源崑子硯玉。

「名画題跋」卷八「趙承旨停琴撥絃圖」

重青綠雲山，巖下正面坐一高士，葛巾深衣，背面坐一高士，黑冠撥絃。右有大松二樹，樹旁童子駕轡大袖，雙結手捧石榴一盆。

山足多鹿，葱花樹根。細楷書款。脉望生記。

⑭ 「法書題跋」卷一八「江岡赫驍名蹟」

復初於此道爲項氏白眉，與余交最暱，時追念也。

⑮ 「名画題跋」卷一八「墨荷」

不意，癸亥冬日，余自北還，項君已謝人間世矣。

⑯ 「名画題跋」卷二「項子京花鳥常春冊」

己未春，項又新邀余，會玄宰先生于讀書堂，出書畫評玩。…（中略）…未幾，又新謝世，玩好迸逸。

⑰ 「謝一九九八」卷五、三七三頁を参照。

⑱ 余紹宋『書畫書錄解題』卷六「著錄」四「鑒賞」

此編，體例略同於朱氏『珊瑚木難』，郁氏『書畫題跋記』，汪氏『珊瑚網』，蓋一時風氣如是。大約明代著錄之書，多偏重於題跋，故蹟僞跋眞者，亦仍采入。…（中略）…而錄之者四卷，共著錄百六種。書多於畫，間亦雜以碑帖。

⑲ 項穆と『書法雅言』については、『楊二〇〇八』「項穆其人」（一一一五頁）および同「項穆書學思想評述」（二七四—一九四頁）を参照。

⑳ 姜紹書『韻石齋筆談』（『歷代芸術史料叢刊』書畫編、華東師範大學出版社、二〇〇九年、撓順治刻本点校）卷下「項墨林收藏」

癸酉歲，北兵至嘉禾，項氏累世之藏，盡千夫長汪六水所掠，蕩然無遺。

㉑ 吳其貞『書畫記』（『文淵閣四庫全書』所収本）卷三「黃大痴水閣圖小紙画一幅」

時壬辰端午日、予到嘉禾、過子昆家得見之。子昆墨林孫、時項氏六大房物已散盡、惟子昆稍存耳。

⑬ 吳其貞『書畫記』卷六「梁楷王右軍題扇圖紙画一小卷」

二圖、觀於嘉興李孝廉家。孝廉則會嘉長公郎也。是日所見、昔時觀者十無一二矣。時乙卯三月二日。

⑭ 吳其貞『書畫記』卷四「張樛紫楷書杜詩一首」。この段落の内容については、「井上二〇〇四」六一—六二頁を参照。

⑮ 吳其貞『書畫記』卷三「黃山谷千字文一本」

以上五種、觀于嘉禾姚漢臣長孫處。漢臣、尚書子、蓋當日與程季白爭收古玩者。時甲午七月既望。

⑯ 曹函光（生没年不詳）は、字は瞻明、書法に優れ、「篤社」の同人であつた人物。汪氏父子が所藏する唐楊《樂毅論》を割愛され、その謝札を手紙と共に届けたこと、郁逢慶所藏の黄公望の画冊に題跋を記したことが伝えられており、明末における嘉興の重要な賞鑒家の一人であつた。

「法書題跋」卷一八「江岡赫驪名蹟」

唐楊《樂毅論》、蒙割愛見許、謹奉原值、少佐買蘭之費、望鑒存。幸幸。玉水翁兄大人教下。弟函光頓首。

郁逢慶『郁氏書畫題跋記』卷八「黃大癡層巒積翠」

右倪黃二畫、玩味竟日、清氣逼人。……（中略）……錄其題語於叙退冊上、以記一時之興。崇禎辛未重九日、曹函光識。

⑰ 朱彝尊『靜志居詩話』卷二〇「李肇亨」

萬曆以來、承平日久、士大夫留意圖書、討論藏弃、以文會友、對酒當歌、「篤社」之集、譚梁生偕會嘉和之、先後賦者三十三人、事未百年、而閭閻故老、已莫能舉其姓氏。玉杯錦席之地、皆化為宿草荒煙、惟李氏高山一樓、尚未椒飛粉落、宛然靈光之在魯、錄珂雪之作、不禁慨然。

⑱ 「篤水詩社初刻序」は、李日華『恬致堂集』卷一四所收。「篤水月社編序」については、第一章第二節に前掲の註⑬を参照。

⑲ 謝肇淛『五雜俎』（明万曆中京山李氏刊本、全一六卷）卷七「人物」三

今世書畫有七厄焉。高價厚值、人不能售、多歸權貴、眞贋錯陳、一厄也。豪門籍沒、盡入天府、蟬蠹漸盡、永辭人間、二厄也。噉名俗子、好事估客、揮金爭買、無復涇渭、三厄也。射利大賈、貴賤懸遷、纔有風息、即轉俗手、四厄也。富貴之家、朱門空鎖、

榻笥凝塵，脈望果腹，五厄也。膏梁紈袴，目不識丁，水火盜賊，恬然不問，六厄也。拙工裝潢，面目損失，奸僞臨摹，混淆聚訟，七厄也。至於國破家亡，兵燹變故之厄，又不與焉。

参考文献一覽

《日文》

井上充幸

二〇〇〇 『明末の文人李日華の趣味生活——「味水軒日記」を中心に——』『東洋史研究』第五九卷第一号

二〇〇四 『徽州商人と明末清初の芸術市場——吳其貞『書畫記』を中心に——』『史林』第八七卷第四号

二〇〇六 『姜紹書と王越石——『韻石齋筆談』に見る明末清初の藝術市場と徽州商人の活動——』『東洋史研究』第六四卷第四号

二〇一一 『「竹嬾茶衡」拾遺——明末の文人李日華の喫茶生活——』（西村昌也編『東アジアの茶飲文化と茶業』周縁の文化交渉学シリーズ1、関西大学文化交渉学教育研究拠点、二二—五五頁）

何炳棣

一九九三 『科挙と中国近世社会——立身出世の階梯——』寺田隆信・千種真一訳、平凡社

岸本美緒

一九九九 『明末清初の地方社会と「世論」』『明清交替と江南社会——一七世紀中国の秩序問題——』東京大学出版会、一一—二五頁

金文京

二〇一一 『明清時代の身分感覚』（『風俗と時代観——明清史論集1——』研文出版、一四七—一七八頁）

二〇〇二 『明代万暦年間の山人の活動』『東洋史研究』第六一卷第二号

一九九〇 『晚明画評』（明代史研究会等編『山根幸夫教授退休記念明代史論叢』汲古書院、下巻一三七九—一三九八頁）

二〇〇三 『乾隆皇帝の画学について』（『中国画論の研究』中央公論美術出版、二五一—三二六頁）

鈴木博之

一九九八 『徽州商人の一系譜——溪南呉氏をめぐる——』『東方学』第九八輯

相田洋

一九八四 『明代における体制イデオロギーと民衆思想』（九州大学文学部東洋史学研究室編『一九八三年中国史シ

- 中嶋隆蔵
二〇〇四 『明万曆嘉興藏の出版とその影響』(平成一三・一四・一五・一六年度科学研究費補助金研究成果報告、課題番号一三〇二二一〇一)
- 中砂明徳
二〇〇二 『江南—中国文雅の源流—』(講談社選書メチエ二五〇)
- 中田勇次郎
一九七六 『文房清玩史考』(『文房清玩』五、二玄社、三一九二頁)
- 濱島敦俊
二〇一四 『明代江南は「宗族社会」なりしや』(『山本英史編『中国近世の規範と秩序』研文出版、九四—一三五頁)
- 藤本猛
二〇〇八 『宋徽宗「蔡行勅」考』『書論』第三六号
- 藤原有仁
一九八一 『董其昌とその周辺』(古原宏伸編『董其昌の書画』二玄社、研究篇、一二三—一四四頁)
- 増田知之
二〇〇三 『明代における法帖の刊行と蘇州文氏一族』『東洋史研究』第六二卷第一号
- 《中文》
- 杜信孚・杜同書
二〇〇一 『全明分縣分省刻書考』全一〇冊、綾裝書局
- 封治国
二〇一三 『与古同游—項元汴書画鑒藏研究—』中国美術学院出版社
- 傅申
一九八一 『元代皇室書画収蔵史畧』国立故宮博物院(故宮叢刊甲種之一八)
- 龔肇智
二〇一一 『嘉興明清望族疏證』上・中・下巻、方志出版社
- 韓進・朱春峰
二〇一二 『鉄網珊瑚校証前言』(『鉄網珊瑚校証』上・中・下、広陵書社、一一二六頁)
- 井上充幸
二〇一三 『姜紹書与王越石—《韻石齋筆談》所見明末清初芸術市場与徽州商人的活動—』(万爽・陸蓓容訳、范景中・曹意強・劉敎主編『美術史与觀念史』XIV、南京師範大学出版社、三八二—四一一頁)
- 劉金庫
二〇〇八 『王阿玉与『珊瑚網』』(『南画北渡—清代書画鑒藏中心研究—』河北教育出版社、第三章第二節、八六—九一頁)
- 毛文芳
二〇〇一 『晚明「狂禪」探論』『漢学研究』第一九卷第二期
- ンボジウム 元明清期における国家「支配」と民衆像の再検討—「支配」の中国的特質—、九州大学文学部東洋史学研究室、一〇九—一二六頁)

容庚

一九八〇『叢帖目』全四冊、中華書局

沈紅梅

二〇一二『項元汴書畫典籍收藏研究』國家圖書館出版社

謝巍

一九九八『中國畫學著作考錄』上海畫出版社

徐德明

二〇一一『校点說明』《清河畫舫》上海古籍出版社、古代書畫著作選刊、一一二頁

万木春

二〇〇八『味水軒裡的閑居者——万曆末年嘉興的書畫世界——』中央美術學院出版社

楊亮

二〇〇八『項穆・書法雅言』江蘇美術出版社

楊仁愷

一九九〇『中國書畫』上海古籍出版社

葉梅

二〇一三『晚明嘉興項氏法書鑒藏研究』中國社會科學出版社

章宏偉

二〇〇四『故宮博物院藏《嘉興藏》的價值——從《嘉興藏》學術研究史角度的探討——』《故宮學刊》二〇〇四年總第一輯、紫禁城出版社、五四〇—五八五頁

【付記】

本論文の脱稿後、韓進・朱春峰『珊瑚網』、饒録郁逢慶『書畫題跋記』考兼及明代公共編目人的著述困境——（『華東師範大學學報（哲學社會科學版）』二〇一五年第二期、一五七—一六六頁）の存在を知った。この論文では、第二章において現存する『郁氏書畫題跋記』の諸本のテキストの異同を対校した後、第三章において『珊瑚網』との重複箇所について、第四章において撰者名の改変について、それぞれ指摘した上で、第五章の結論部分において、①『珊瑚網』において『郁氏書畫題跋記』の記述が大きな割合を占めていることは、汪珂玉自身の鑑賞力や芸術史上における『珊瑚網』の価値を否定することには直結しないものの、書畫を鑑賞する際の参考資料として使用する上では留意すべきであり、②『四庫全書』編纂以前において、両書は鈔本として限られた仲間同士の範囲内だけで流通するに止まり、いずれの著者も無名の「失意の文人」に過ぎなかったため、撰者名の偽托や記述内容の踏襲について大きな問題とはならなかったこと、などが述べられている（いずれも一六五頁）。結果として屋上屋を架すこととなってしまうが、以上については、いずれも本論文第二章第三節において指摘した諸点と重なるものであるため、併せて参照されたい。

（本学文学部教授）